

都留市埋蔵文化財調査報告第10集

鷹 の 巣 遺 跡

中央自動車道富士吉田線四車線化工事に伴う発掘調査報告書

1985.3

都留市教育委員会
日本道路公団東京第二建設局

序

今度の調査は、鷹の巣遺跡発掘調査で、中央自動車道富士吉田線工事に伴う五遺跡調査（堀之内遺跡、宮脇遺跡、中谷遺跡、山梨原遺跡、鷹の巣遺跡）の最終遺跡調査であり、中央自動車道四線化工事に関する予定地内調査は本調査にて終結することになります。

1978年10月から取組み7ヶ年間にわたった調査であり、それぞれの発掘調査は貴重な文献として報告され永く保存されます。

ここに当初よりご教授、ご協力をいただいた県文化課、それに直接ご指導を賜わった諸先生、日本大学考古学研究会、都留文科大学考古学研究会のみなさんに対し精力的に取組み文化財保護の貢献度を高く評価し、限りなき敬意と感謝の意を表す次第であります。

あわせて日本道路公団に対しましては当教育委員会として最大の謝意を、担当の係官に対しては、常に民意を心してご協力ご助言厚くお礼を申し上げる次第であります。

終りに都留市の文化財、自然保護を更に進展せしめ貴重な体験を無にすることのなきよう心して取組むことを誓いご挨拶といたします。

1985年3月31日

都留市教育委員会

教育長 内藤盈成

例　　言

1. 本書は昭和55～58年度に、日本道路公団東京第二建設局と、都留市教育委員会との委託契約により実施した、中央自動車道富士吉田線四車線化工事に伴う鷹の巣遺跡の緊急調査報告である。

本書作成の委託契約は、昭和59年度に行われた。

2. 本書の作成は、都留市教育委員会が行った。執筆・編集は、小林安典・奈良泰史・谷口栄が協議し、第Ⅰ・第Ⅴ章は奈良、第Ⅱ・Ⅲ章は小林、第Ⅳ章は小林・奈良・谷口が執筆した。
3. 図版の作成は、小林・奈良・谷口が主に行った。
4. 土器の復元は、奥 隆行先生にお願いした。
5. 遺物及び実測図は、都留市教育委員会が保管している。
6. 本調査の調査組織は、別に示すとおりである。
7. 発掘調査・報告書作成にあたって、次の諸氏に御教授を賜った。(敬称略)

末木 健・坂本美夫・田代 孝・新津 健(山梨県文化課)

堀内 真(富士吉田市教育委員会)・天野保子(西桂町教育委員会) 一順不同一

甲斐 博之(国学院大学学生)

調　　査　　組　　織

1. 調査主体者 都留市教育委員会
2. 調査担当者 奥 隆行(日本考古学協会員)・奈良泰史(都留市教育委員会)
3. 調　　査　　員 小林安典・谷口 栄・渡辺儀訓
4. 補　　助　　員 島村英之・林 宏一・富元久美子・伊藤正人・平林 彰・依田千春・町田勝則
吉沢みゆき・大貫裕久・岡本由佳・桜間 潤・村山博之・高橋 努・宮内秀明・
山根則子・守安幸代・宍戸美智子・大崎裕美・大野陽子・平佐枝子・日向容子・
和泉昭一
谷村 聰・久保 肇・松田 透・与倉秀俊・米沢伸二・中村 稔・増渕裕子・
加々美恵子・森下恵三子・堀 明美・宇佐美秀之・青山洋子・加藤宏司
(日本大学考古学研究会)
5. 作　　業　　員 小林さと子・志村あき子・勝俣松江・金子ふく・志村かつ子・志村こう・
三枝もと子・奥村八重子・金子菊子・金子安子・鈴木金平・稻村新蔵・
遠藤ふじの・遠藤ハツノ・遠藤定幸・遠藤 孝・遠藤みよの・遠藤さの・
遠藤やよい・近藤サエ・矢竹高江・後藤武雄・清水まさ子・小俣 都・
清水喜子・清水米子・小幡貞子・小幡八郎・小俣富子・松本秀樹・坂野利光・
塩沢 忍・園田忠男・植松広行・川村 悟・木原隆夫・伊藤雅之・長谷川和志・
玉川一守・金子栄寿・今 真志・園田博之・藤田伸朗・今塩屋誠・和田吉功・
川村 修・保坂公仁・池田 智・林 康夫・増田康夫・増田篤彦
6. 整　　理　　員 佐藤公利・渡辺 丈・久保 肇・松田 透・菊池保江・堀内和子・堀内いずず・

高橋広子・中野とし子・大田 泉・小沢克子・丹野太郎・高橋 努・三好広起・
尾形栄子・萱沼美和子・谷口真弓・

7. 事務局 教育課長 棚本安男（S57.3.31まで）
社会教育課長 園田豊丸（S57.4.1～S59.3.31）
（S57.4.1より設置） 日向丈夫（S59.4.1～）
社会教育係長 望月孝一（S58.3.31まで）
河口智範（S58.4.1～）
係 奈良泰史
重原達也（S57.3.31まで）
藤江きく江（S57.4.1～）

目 次

序

都留市教育委員会教育長 内藤盈成

例 言

調査組織

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯

第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	1

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置と自然環境	3
第2節 遺跡の考古学的環境	4

第Ⅲ章 層 序

第1節 層 序	6
第2節 層序と遺構	6

第Ⅳ章 発掘調査の成果と概要

第1節 A地区の概要と成果	7
1 概 要	7
2 遺 構	7
3 遺 物	19
第2節 B地区の概要と成果	21
1 概 要	21
2 遺 構	23
3 遺 物	28
第3節 C地区の概要と成果	36
1 概 要	36
2 遺 構	36
第4節 D地区の概要と成果	46
1 概 要	46
2 遺 構	47
3 遺 物	51
第5節 E地区の概要と成果	52

1	概要	52
2	遺構	53
3	遺物	64

第V章 まとめ

第1節	概要	66
第2節	住居址について	66
第3節	ピットについて	67
第4節	溝状遺構について	67

おわりに

挿 図 目 次

第1図 鷹の巣遺跡位置図	2
第2図 鷹の巣遺跡調査地区位置図	3
第3図 都留市歴史時代遺跡分布図	5
第4図 標準土層	6
第5図 A地区全体図	7
第6図 第1号住居址遺構図	8
第7図 第1号住居址遺構図(掘り方)	10
第8図 第1号住居址出土土器実測図	12
第9図 第2号住居址遺構図	14
第10図 第2号住居址遺構図(掘り方)	16
第11図 第2号住居址出土遺物実測図	16
第12図 第1・2・3号土塙遺構図	17
第13図 第1号溝状遺構図	19
第14図 A地区出土土器拓影・実測図	20
第15図 B地区グリッド配置図	21
第16図 B地区遺構配置図	22
第17図 B地区掘立柱式建物址想定図(1:100)	27
第18図 B地区遺物出土頻度図	28
第19図 B地区出土土器実測図(1)	30
第20図 B地区出土土器実測図(2)	32
第21図 B地区出土土器実測図(3)	33
第22図 B地区出土土器実測図(4)	34
第23図 B地区出土土器実測図	35
第24図 C地区遺構配置図	37
第25図 ピット配置図	38
第26図 1号掘立柱建物址	42
第27図 2号掘立柱建物址	43
第28図 C地区出土遺物	45
第29図 D地区グリッド配置図	46
第30図 D地区遺構配置図	47
第31図 D地区遺構図(P1～P4)	49
第32図 D地区遺構図(P5～P9・1溝)	50
第33図 D地区出土遺物	51

第34図 E地区位置図	52
第35図 E地区グリッド設定	52
第36図 E地区遺構配置図	54
第37図 1号住居址遺構図	55
第38図 1号住居址出土遺物	55
第39図 2号住居址遺構図	56
第40図 2号住居址出土遺物実測図(1)	59
第41図 2号住居址出土遺物実測図(2)	60
第42図 E地区出土遺物実測図	65
第43図 鷹の巣遺跡ピット規模分布図	67
第44図 鷹の巣遺跡溝状遺構規模分布図	68

写 真 目 次

A地区で検出された溶岩	6
第1号住居址カマド(1)	9
第1号住居址カマド(2)	9
第1号住居址遺物	9
第1号住居址	11
第1号住居址(掘り方)	11
第2号住居址	15
第1・2号住居址	15
第1・2・3号土塙	18
第1号溝状遺構	18
B区掘立柱建物址柱穴址全景	26
B区掘立柱建物址	26
B区掘立柱建物址	26
C地区全景	36
C区ピット群(1号掘立柱址)	40
C区ピット群(2号掘立柱址)	40
C地区溝状遺構全景	44
4~12号溝状遺構	44
13号溝状遺構	44
17・18・20・21・24号溝状遺構	44
3・4号溝状遺跡	44
16・19・22号溝状遺構	44

D地区全景	47
第1・5・6・7号ピット近景	48
第2・4・9号ピット、第1号溝状遺構	48
D地区全景	51
E地区近景	53
E地区調査風景	53
2号住居址調査風景	57
2号住居址調査風景	57
2号住居址全景	58
2号住居址カマド	58
E地区全景	61
No. 15ピット	61
No. 16ピット	61
No. 1溝状遺構	63
No. 3溝状遺構	63
溝状遺構調査風景	63

表 目 次

第1表 歴史時代遺跡一覧表	4
第2表 第1号住居址出土土器一覧表	13
第3表 第2号住居址出土土器一覧表	17
第4表 B地区ピット一覧表	23
第5表 掘立柱式建物址一覧表	27
第6表 B地区グリッド別出土土師器(坏)集計表	28
第7表 B地区出土土器一覧表	29
第8表 C地区ピット一覧表	39
第9表 C地区溝状遺構一覧表	41
第10表 D地区遺構一覧表	47
第11表 D地区出土遺物一覧表	51
第12表 E地区ピット一覧表	61
第13表 E地区溝状遺構一覧表	63
第14表 E地区出土遺物観察一覧表	64
第15表 鷹の巣遺跡住居址一覧表	66

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯

第1節 発掘調査に至る経緯

中央自動車道富士吉田線は、高井戸インターから河口湖インターに至る全長約92.3kmの高速自動車道である。本路線は、高井戸インターから大月ジャンクションまでの約69.9kmは4車線であるのに、これより河口湖インターまでの約22.4kmは2車線という変則的なものとなっていた。

昭和53年9月、山梨県教育庁文化課より中央自動車道富士吉田線大月ジャンクションから河口湖インターまでの4車線化工事計画の連絡と、それに伴う都留市内の埋蔵文化財包蔵地の照会があった。

照会に基づき、県文化課と共に、事業計画区内の埋蔵文化財包蔵地の踏査を実施したところ、堀之内原遺跡、宮脇跡跡・中谷遺跡・鷹の巣遺跡・山梨原遺跡の5遺跡が同路線建設予定地内に該当することが判明した。

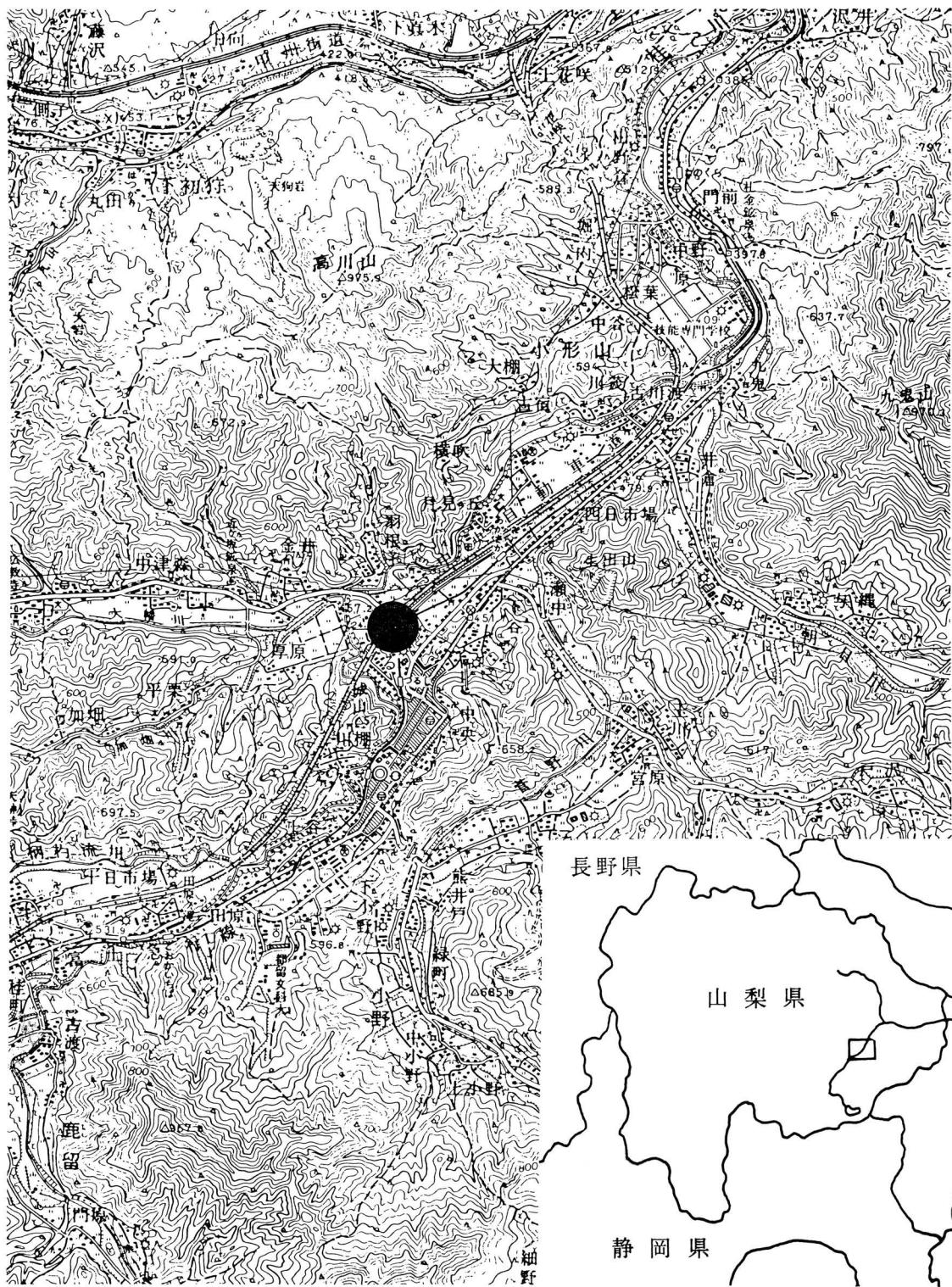
そのため、日本道路公団東京第二建設局、県文化課、当教育委員会の三者で協議した結果、堀之内原遺跡は昭和53年度、中谷遺跡・宮脇遺跡・山梨原遺跡は昭和54年度、鷹の巣遺跡は昭和55年度以降に、それぞれ記録保存を目的として、当教育委員会と日本道路公団東京第二建設局との委託契約により、発掘調査を実施することになった。

これらの内、堀之内原遺跡は昭和53年10月5日～同年11月16日まで発掘調査を実施し、昭和55年3月、「堀之内原遺跡発掘調査報告書」として刊行され、宮脇・中谷遺跡は昭和54年8月1日～同年11月15日（宮脇遺跡は8月31日）まで発掘調査を実施し、昭和56年3月、「中谷・宮脇遺跡発掘調査報告書」として刊行された。また、山梨原遺跡は昭和54年12月14日～昭和55年3月5日まで発掘調査を実施し、昭和57年3月、「山梨原遺跡発掘調査報告書」として刊行されている。

第2節 発掘調査の経過

今回実施した鷹の巣遺跡発掘調査は、4車線化工事用地のA地区と、都留インター建設工事用地B・C・D・E地区とに分かれ、用地買収の終了した地区より順次調査に着手した。

- A地区 昭和55年5月20日～昭和55年8月23日
- B地区 昭和57年10月28日～昭和57年12月29日
- C地区 昭和58年2月21日～昭和58年3月10日
- D地区 昭和58年5月30日～昭和58年6月30日
- E地区 昭和58年7月1日～昭和58年9月3日



第1図 鷹の巣遺跡位置図

第Ⅱ章 遺跡の立地と還境

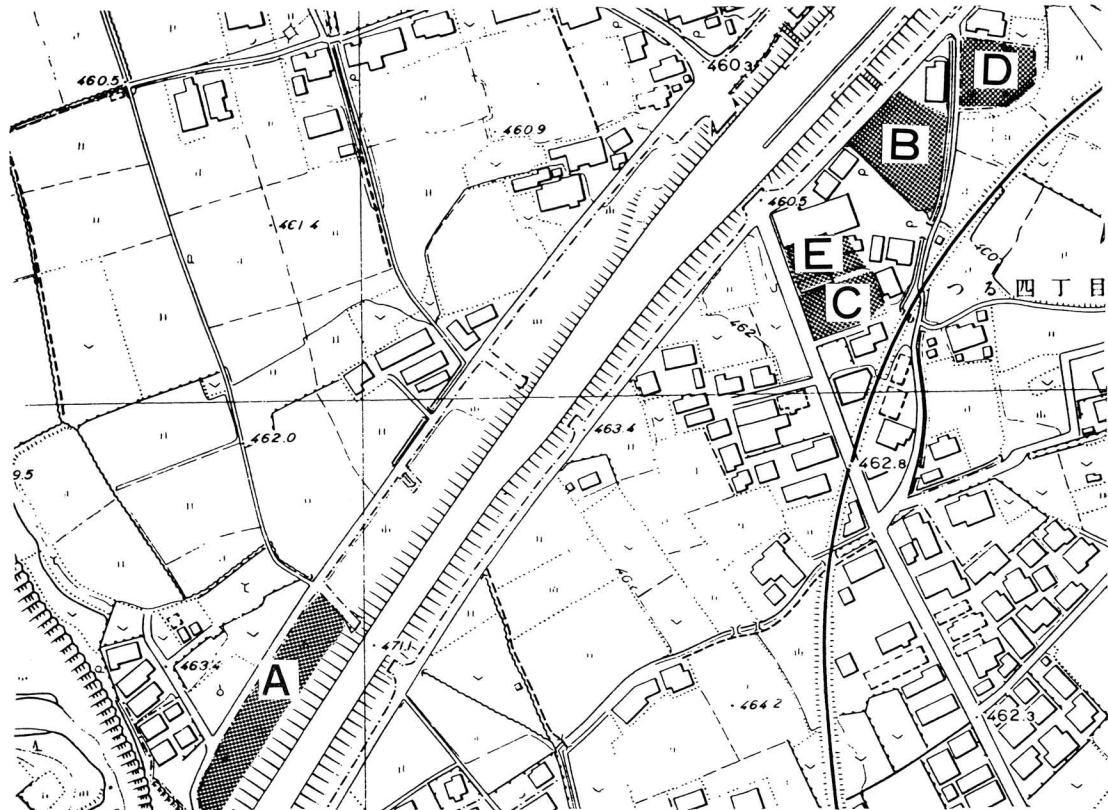
第1節 遺跡の位置と自然環境

中部山岳地帯の南東に位置する山梨県は、地形上、甲府盆地を中心とした富士川水系に属する地域と、相模川・多摩川両水系に属する山梨県東部の、二つの地域に大別され、関東山地から連なる御坂山地が、この二つの地域を隔てる分水嶺となっている。

山梨県東部域は、山間地で平坦地こそ少ないが、多摩川水系に属する丹波川・小菅川および相模川水系に属する桂川・鶴川・道志川・秋山川の各流路には河岸段丘が発達し、数多くの遺跡が立地している。

富士山の豊富な湧水を源として山梨県東部を流れる桂川は、都留市内において柄杓流川・菅野川・朝日川・大幡川等の各支流と合流する。この各流域にはそれぞれの河岸段丘が発達し、縄文時代の遺跡を中心に、数多くの遺跡が立地している。

鷹の巣遺跡は都留市つる四丁目および五丁目に所在する。住居表示実施前の都留市下谷字鷹の巣に由来して名付けられ、中央自動車道富士吉田線によって、つる四丁目と同五丁目に区分されたもので、富士山から流出した猿橋溶岩の上に位置している。



第2図 鷹の巣遺跡調査地区位置図

第2節 遺跡の考古学的環境

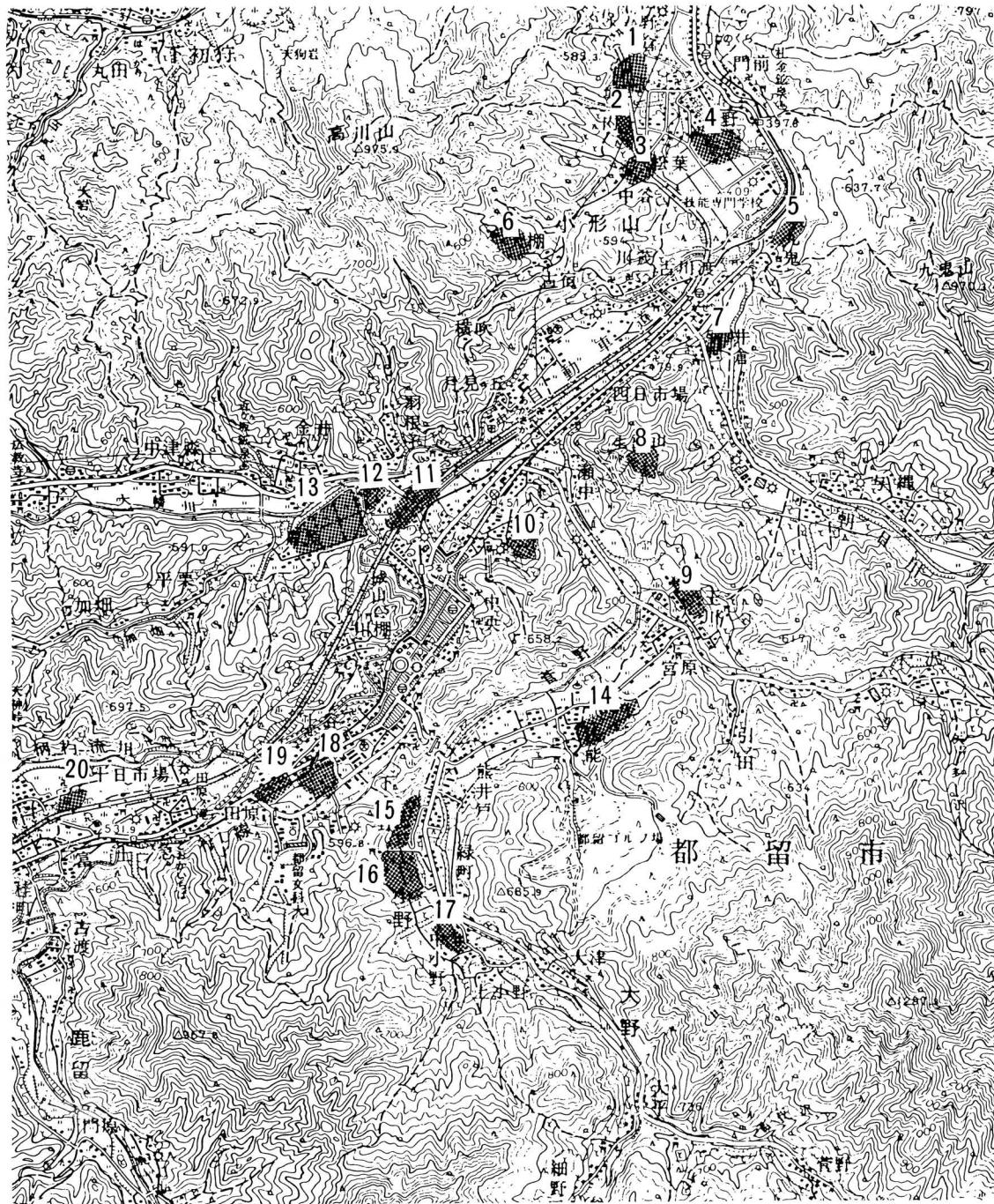
山梨県東部において、土師器・須恵器を伴う古墳時代～平安時代の遺跡は、120ヶ所を越え、主に桂川流域に分布している。それらの内、8世紀以前の遺跡は河口湖周辺および、桂川下流においてわずかに認められるのみで、遺跡の大半は9世紀以降のものである。都留市内においても、弥生時代以後、しばらく遺跡の空白期が続き、8世紀中頃を境に増加しはじめ、9世紀に入ると急増する状況がうかがわれる。

特に、鷹の巣遺跡が立地する桂川右岸の猿橋溶岩流上には、9世紀前の遺跡は認められず、9世紀に入って、遺跡の占地が開始されたものと思われる。

鷹の巣遺跡の周辺には、桂川をはさんで対岸（左岸）に縄文時代中期末の大環状配石、弥生時代中期の住居址・奈良・平安時代の集落址などが発見されている牛石遺跡が所在する。

第1表 歴史時代遺跡一覧表

遺 跡 時 期	1 堀 之内 原	2 宮 脇	3 中 谷	4 原	5 九 鬼	6 大 棚	7 美 通	8 生 山	9 金 山	10 深 田	11 鷹 の 巣	12 道 堀	13 牛 石	14 宮 原	15 十二 割 海 戸	16 権 現 原	17 小 野	18 三 ノ 側	19 二 ノ 側	20 向 原
8c																				
9c																				
10c																				



第3図 都留市歴史時代遺跡分布図

第Ⅲ章 層序

第1節 層序

鷹の巣遺跡の標準土層は、ほぼ6層に分かれる。

第I層（表土層） 工事用道路建設時に敷かれたと思われる瓦礫混りの土層。

第II層（褐色土層） 小豆大の褐色スコリア（1～3mm大）をかなり含有・粘性有。

第III層（黒色土層） 小豆大の褐色スコリア。1～3mm大の黄褐色スコリアを含有。

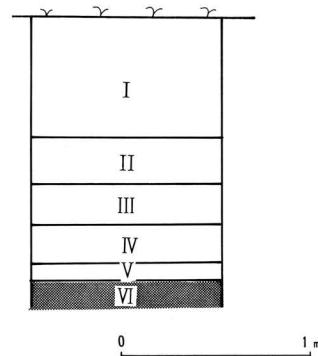
第IV層（暗褐色土層） 小豆大の褐色スコリアをかなり含有。

第V層（黄褐色土層） 黄褐色スコリアを多量に含有。溶岩礫がかなり混在。

第VI層（溶岩）

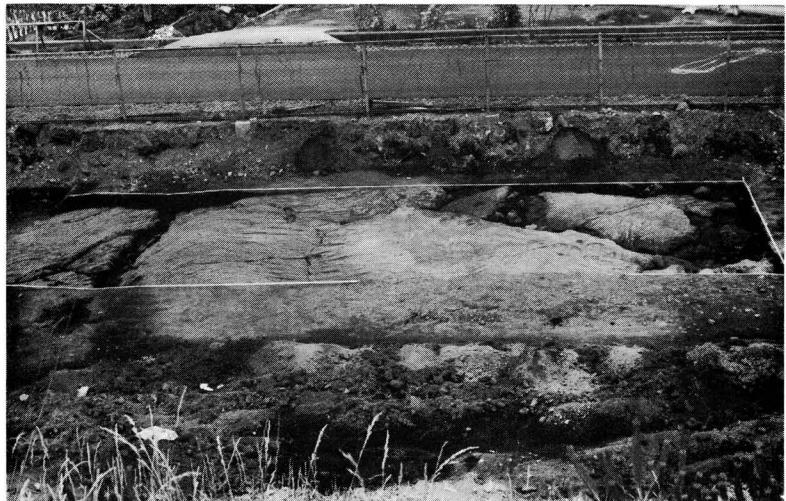
第2節 層序と遺構

鷹の巣遺跡における層序と遺構との関係は、第V層が、住居址・ピット・溝状遺構の検出面となり、第III層が住居址・ピットの、第II層が溝状遺構の、それぞれ覆土となっている。



第4図 標準土層

A地区で検出された溶岩
溶岩の表面は滑らかであったが、かなりの起伏で波打っていた。



第Ⅳ章 発掘調査の成果と概要

第1節 A地区の概要と成果

1 概 要

中央自動車道4車線化に伴う本線部分のうち、当初買収されていた部分をA地区として発掘調査したもので、第1、第2、第3の3地点に細分されたが、第3地点のみ遺構が確認された。

第3地点は、本線北側に位置し延長45.0m、幅2.0m～5.5m、住居址にかかる部分は7.0m（第4図）が調査されたが、北側は側道（市道に移管し供用中）、南側は本線のため、さらに拡幅調査は不可能であった。

2 遺 構

本地点では、歴史時代の遺構として、住居址2軒、土塙3基、溝1基が検出された。

住居址は比較的小規模で、2号住居は一部が本線部分にかかるため完掘できなかったが、それぞれ不整方形を呈し、1号住居址はカマドが西壁に位置していた。

土塙は一ヶ所に集中していて、タライ状を呈している。

溝は調査区北側に位置し、長約4.5m、幅約0.5mであった。

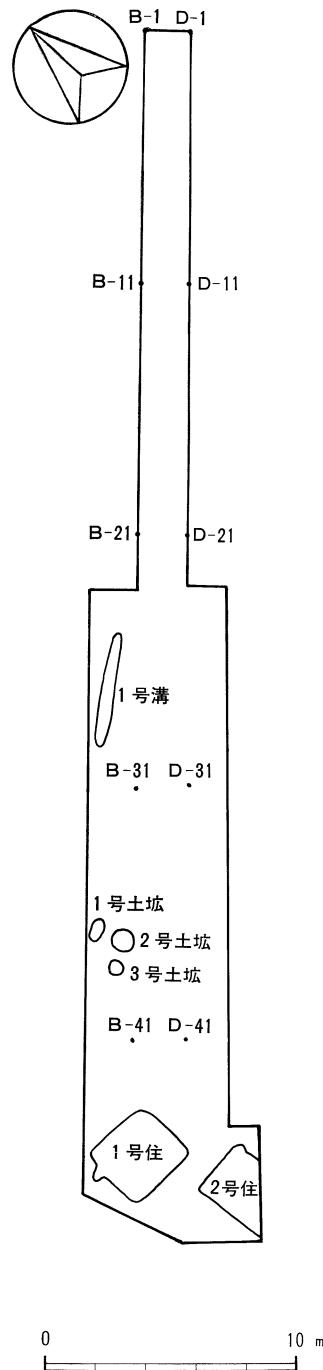
(1) 住居址

第1号住居址

この住居址は、A区第3地点の南西端にあり、2号住居の北側に位置している。

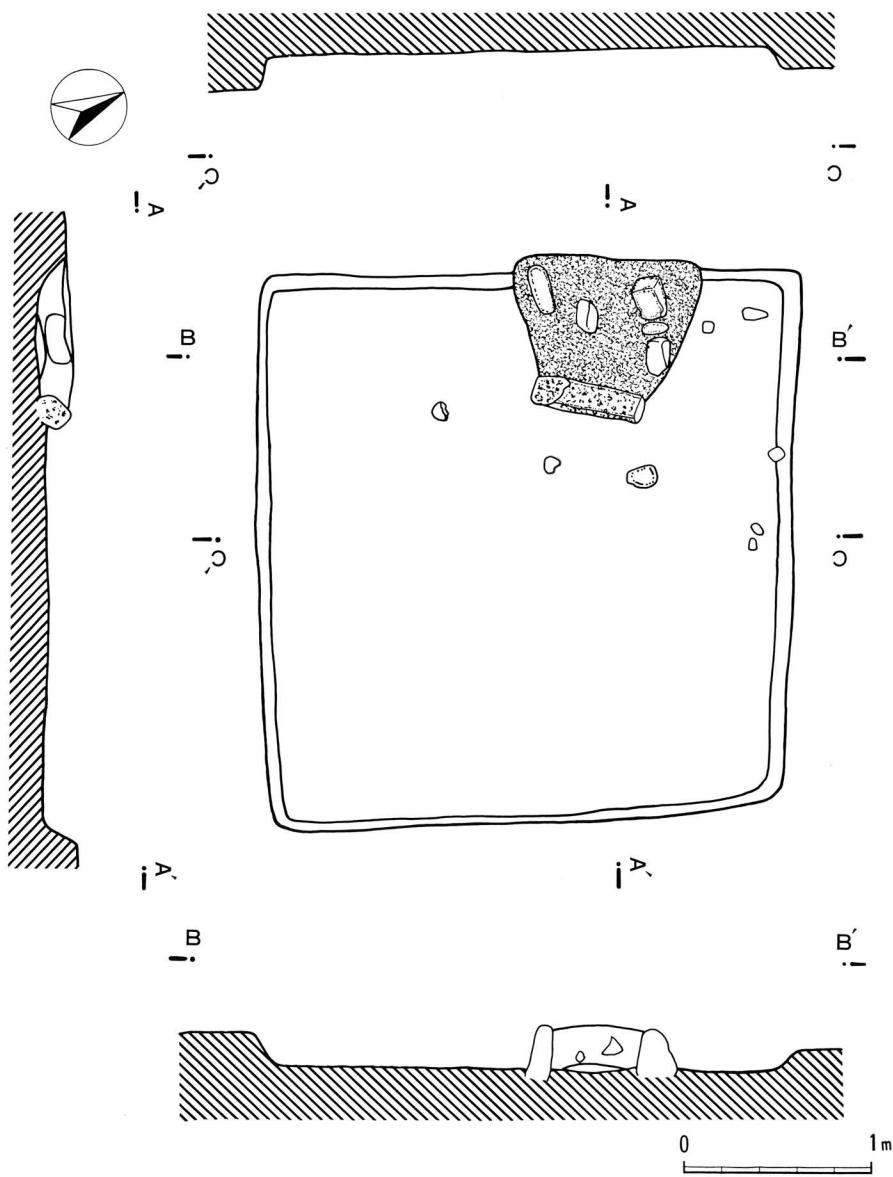
平面プランは、北壁で2.65m、東壁は2.6m、南壁は3.0m、西壁は2.7mの規模をもつ不整方形で、主軸方向は、N-3°-Eである。立ち上がりはほぼ垂直を呈し、壁高は北壁で13cm、南壁は18cm、東壁は18cm、西壁は18cmを測る。床面はほぼ水平で軟弱であった。

カマドは西壁、中央よりやや北側に位置し、残存状態



第5図 A地区全体図

は良好で、左右とも3個の石を芯材として組み、その上を粘土で覆われている。カマド中央に、土師器皿（第8図-1）を乗せた支脚状の石が認められた。

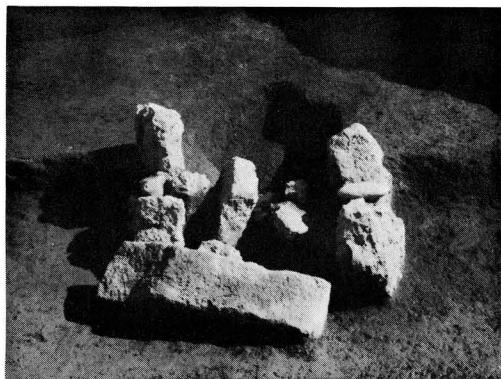
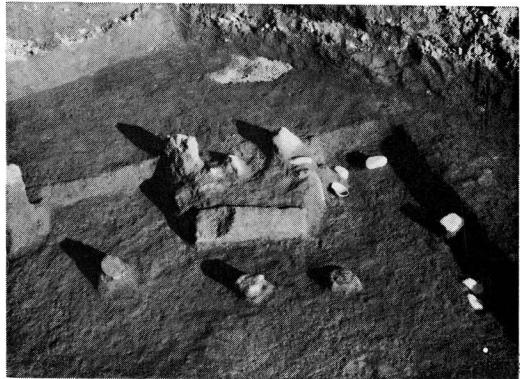


第6図 第1号住居址遺構図

第1号住居址

住居址は、現地表より約60cm下で発見された。一辺3m弱の方形プランを呈し、カマドは西壁において検出された。

カマドは、溶岩を用いて芯材とし、袖部、焚口部を創出している。



第1号住居址カマド(1)

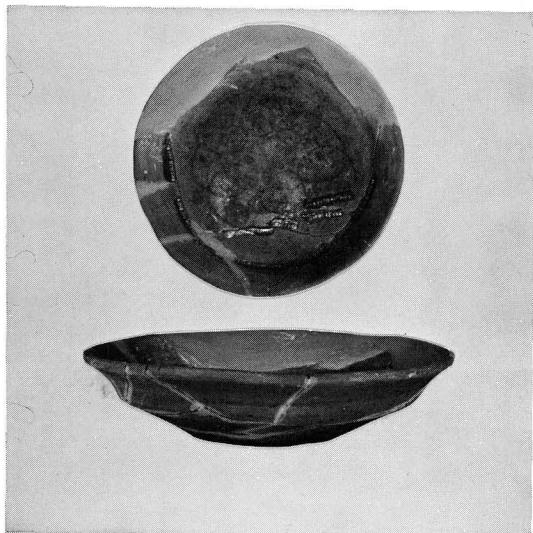


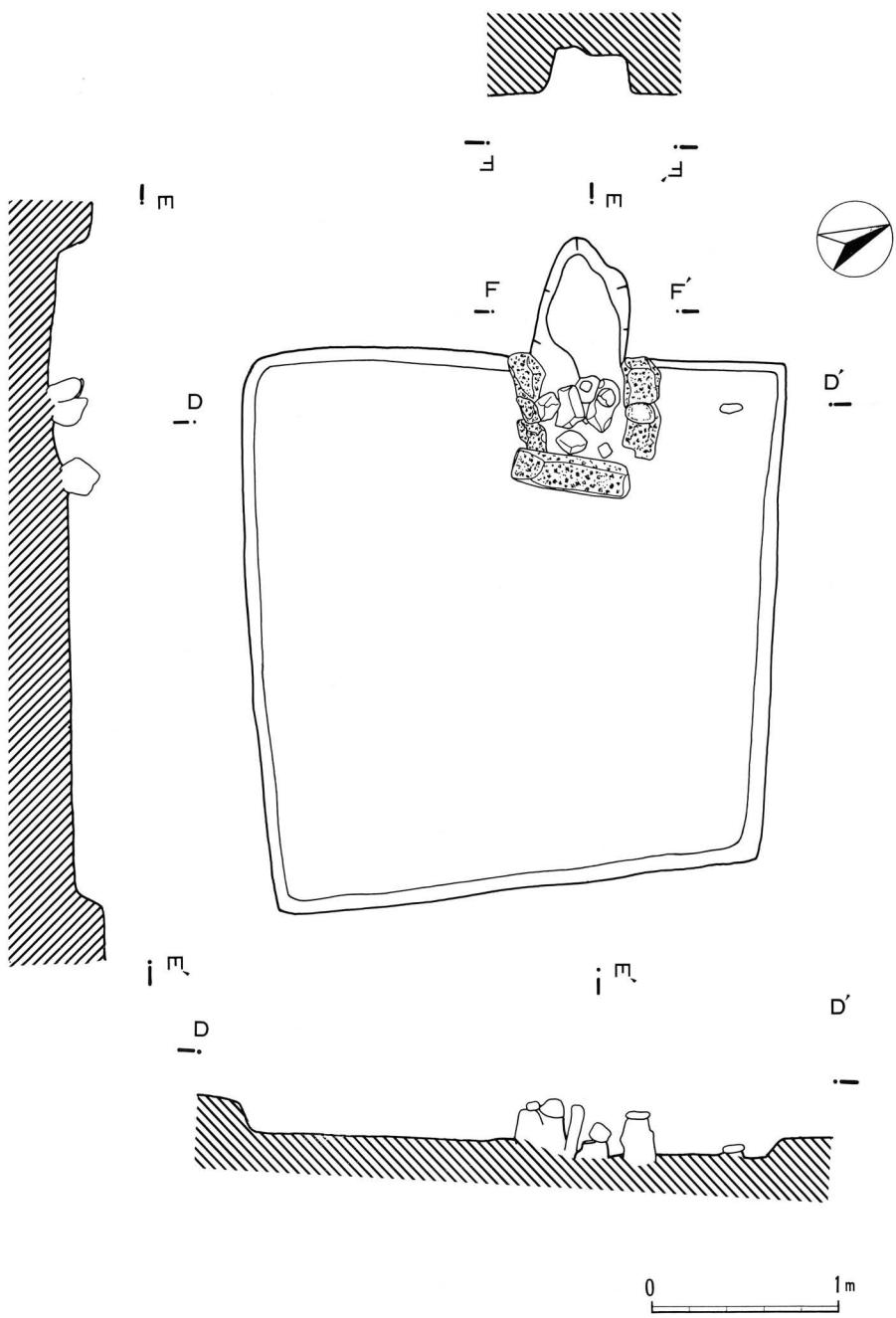
第1号住居址カマド(2)

第1号住居址遺物

写真の遺物は、第7図-1で、口縁部一部欠損してはいるものの、ほぼ完全な形で出土した。この土器はカマド内の支脚上に伏せた状態で出土した。

口径13.9cm、底器6.1cm、器高3.4cmで器内面にらせん状暗文を持つ。

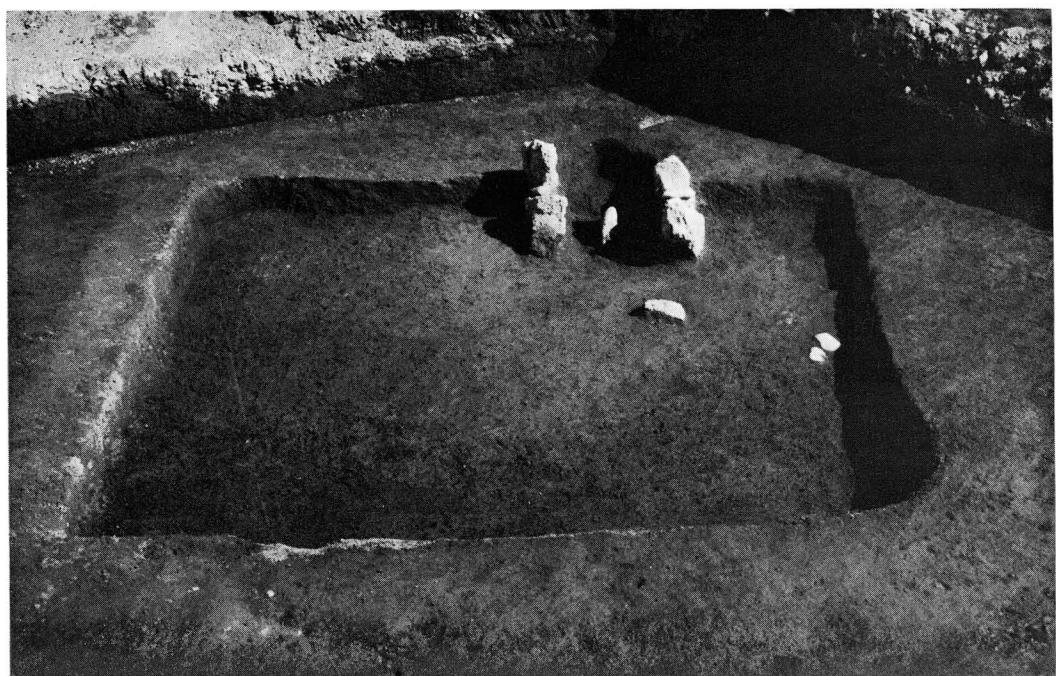




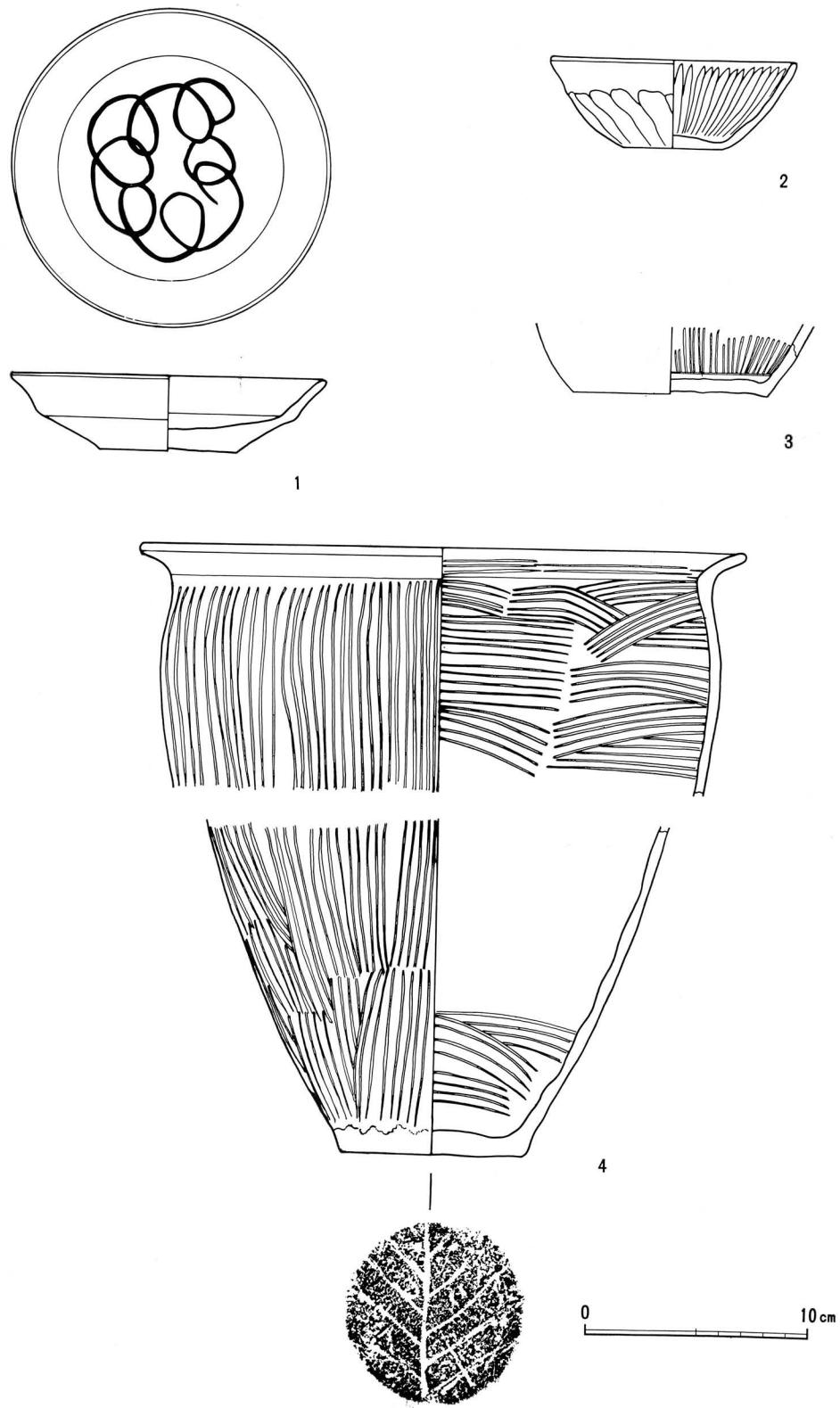
第7図 第1号住居址遺構図（掘り方）



第1号住居址



第1号住居址（掘り方）



第8図 第1号住居址出土土器実測図

出土遺物

本住居址に直接伴うものは、第8図の土師器である。

皿形土器（1）

胴下半部に回転籠削りが施された皿形土器で、器内面にらせん状暗文が施されている。

坏形土器（2・3）

2は胴下半に籠削りが施された坏形土器で、器内面に花弁状の暗文が施されている。3は口縁部欠損した坏形土器で、器内面に放射状暗文が施されている。

甕形土器（4）

口縁部「く」の字状に外反した甕形土器で、器外面に縦方向、器内面に横方向と、それぞれハケ目調整が施されている。

第2表 第1号住居址出土土器一覧表

(単位 cm)

No.	種類	器形	法量	整形	胎土	色調	
1	土師器	皿形土器	(口径) (器高) (底径)	13.9 3.4 6.1	胴下半回転籠削り 器内面らせん状暗文	小砂粒を含有	赤褐色
2	〃	坏形土器	(口径) (器高) (底径)	11.05 4.45 4.1	ロクロ横ナデ、胴下半 籠削り 器内面花弁状暗文	小砂粒を若干含 有した緻密なも のである。	〃
3	〃	〃	(底径)	8.6	ロクロ横ナデ 器内面放射状暗文	〃	〃
4	〃	甕形土器	(口径) (器高) (底径)	27.0 推定約 31.9 8.1	器外面は縦方向ハケ目 器内面は横方向ハケ目	雲母・石英粒を 含有	暗茶褐色

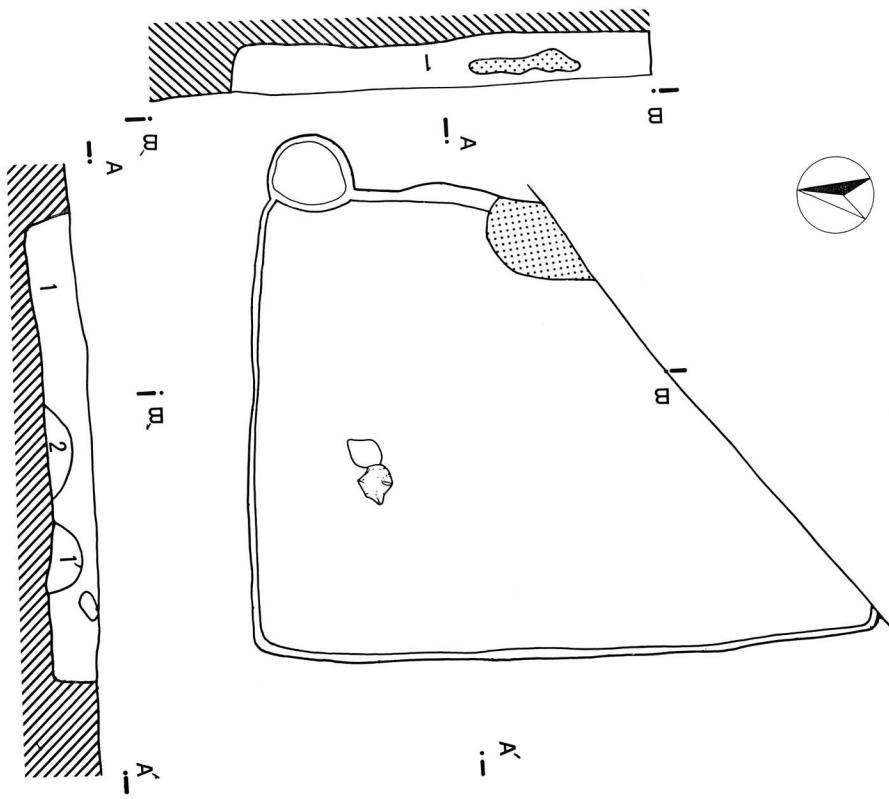
第2号住居址（第9、10図）

第1号住居址の南東側で発見された。本住居址は東側の四分の一ほどが、調査対象外であったために、全貌を明らかにすることはできなかったが、南北2.55m、東西約3.30m程の不整方形プランを呈するものと推定される。カマドは東壁中央部に位置するものと思われるが、未確認である。

出土遺物（第11図-1、2）

本住居址に伴うものは、第10図の須恵器、土師器である。

1は底部欠損した高台付須恵器で、底部はやや角ばったものである。2は、籠削りの施された小型の胴張り甕で、胎土は荒い砂粒の含有したものである。

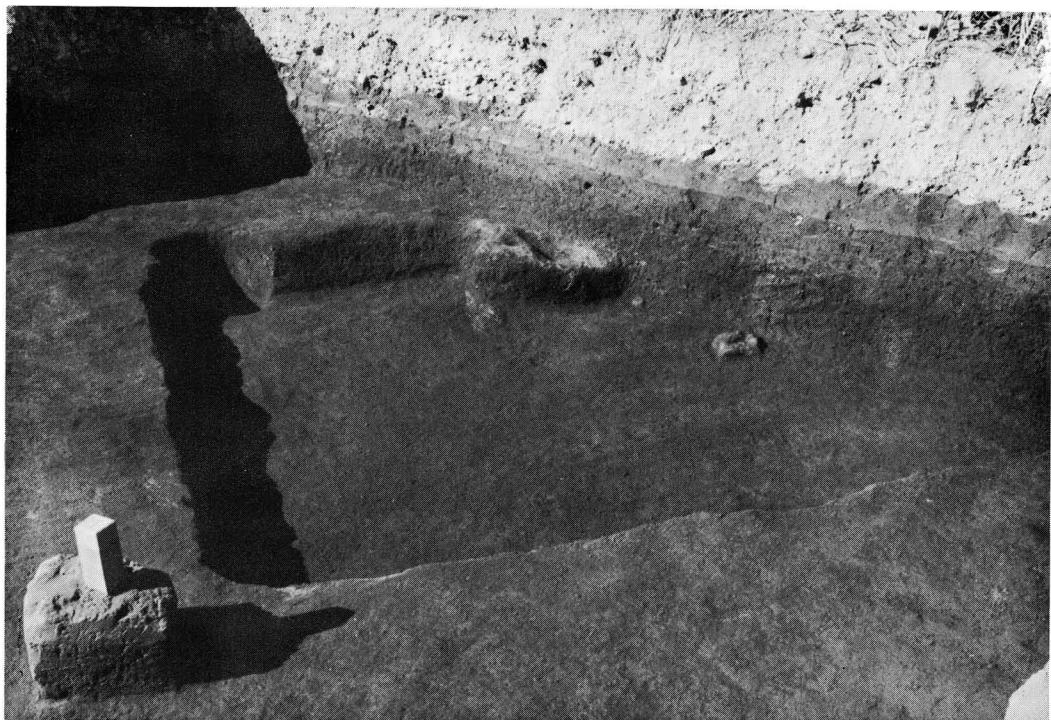


土層説明

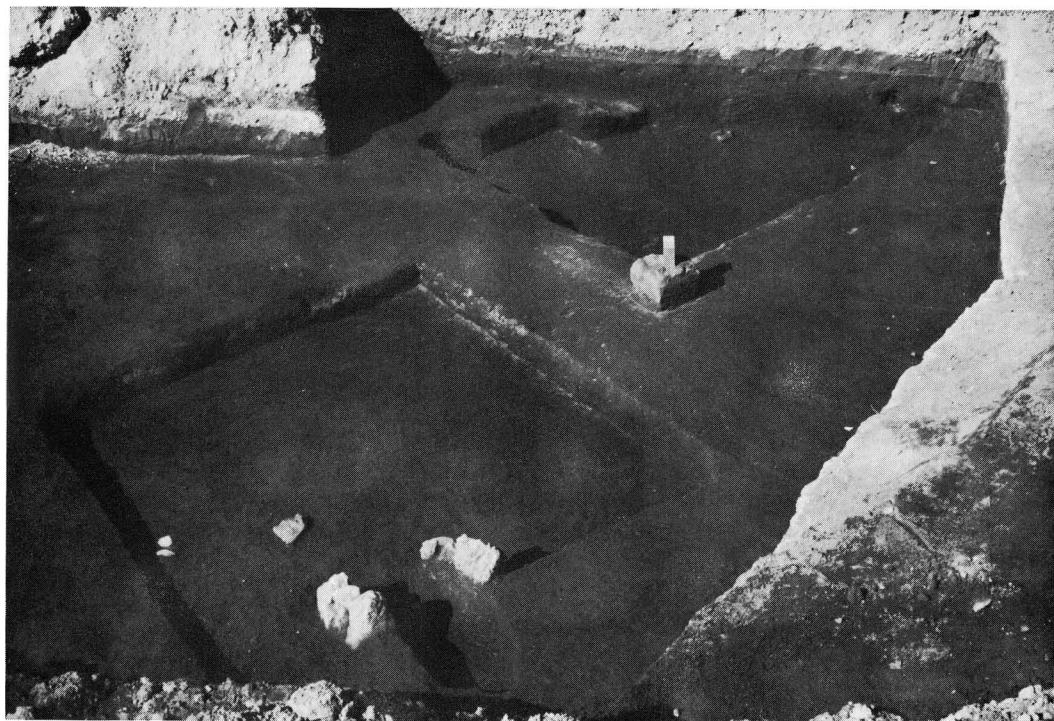
- 第1層 黒褐色土・赤色粒子・1mm~5mm大のスコリア・黄褐色粒子含有、粘性やや強
- 第1'層 第1層より堅く、しまっている。
- 第2層 灰褐色土：黄褐色粒子少量含有、3mm大のスコリア含有。

0 1m

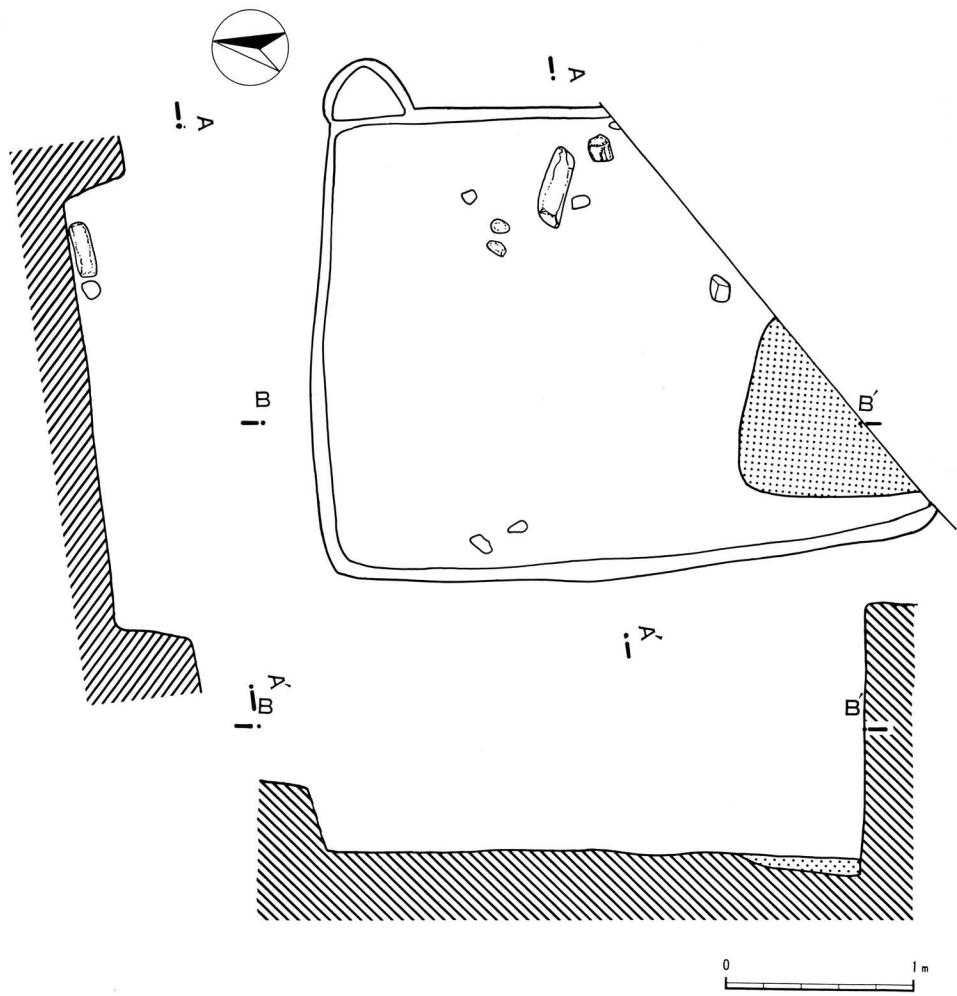
第9図 第2号住居址遺構図



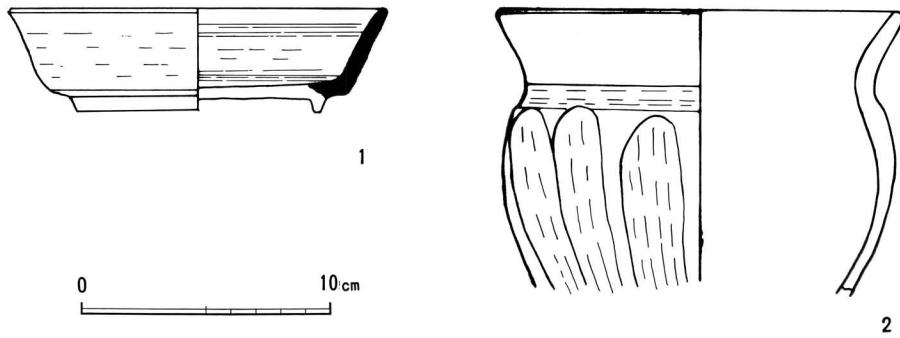
第2号住居址



第1・2号住居址（左侧・1号住居址、右侧・2号住居址）



第10図 第2号住居址遺構図（掘り方）



第11図 第2号住居址出土遺物実測図

第3表 第2号住居址出土土器一覧表

(単位cm)

No.	種類	器形	法量	整形	胎土	色調
1	須恵器	高台付壺形土器	(口径) 約 14.8 (器高) 推定約 4.2 (底径) 約 10.7	ロクロ水引き整形	黒色粒多量に含有	(外面)灰褐色 (内面)赤褐色
2	土師器	小型胴張り甕	(口径) 約 12.8	(外面)範削り (内面)ナデ調整	砂粒を多量に含有し、ザラザラしている	(外面)淡い赤褐色 (内面)黒褐色

(2) 土 坡

第1号土坡

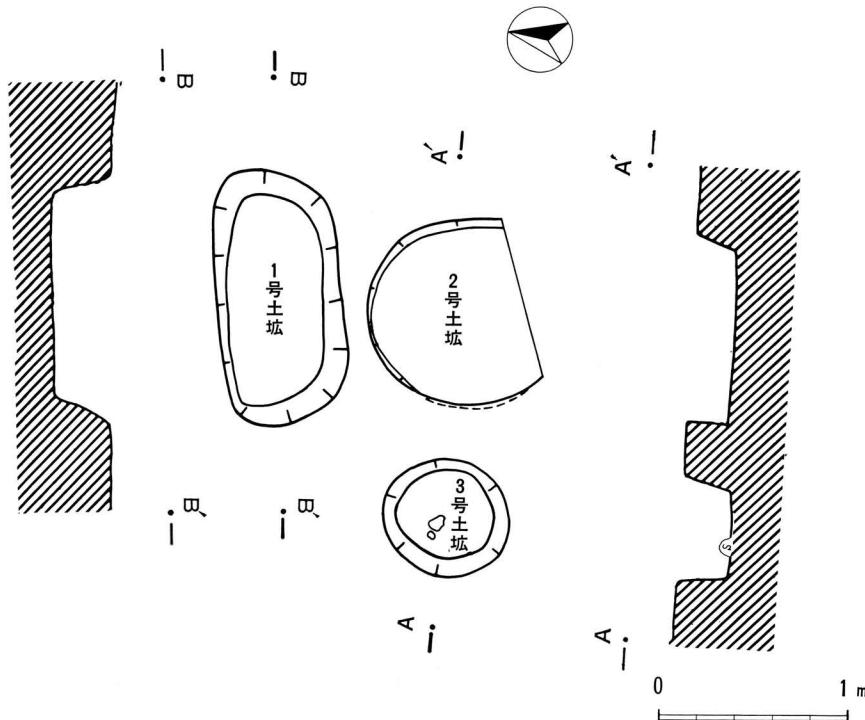
長楕円形プランを呈し、長径1.35m、短径0.65m、深さ0.3mの規模を有し、底面は平坦である。壁の立上がりは西側が急で垂直に近く、北・東・南側は緩やかである。出土遺物なし。

第2号土坡

第1号土坡の南側に隣接し、直径約1.0m、深さ0.2mのタライ状の土坡である。立上がりは西側はオーバーハング気味で、東側はやや緩やかである。出土遺物なし。

第3号土坡

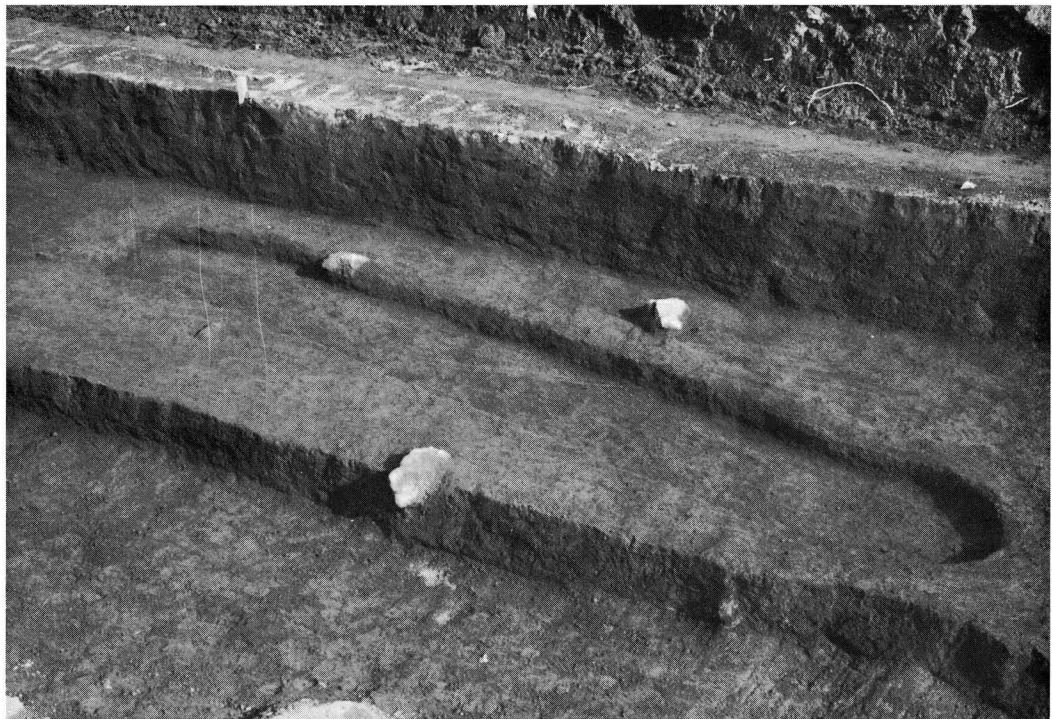
直径0.6m、深さ0.25mのタライ状の土坡である。出土遺物なし。



第12図 第1・2・3号土坡遺構図



第1・2・3号土塚（右側から1・2・3号土塚）



第1号溝状遺構

(3) 溝状遺構

(第13図)

第1号溝状遺構

長さ4.5m、幅最大0.65m、深さ0.1m弱でゆるい弧を呈する溝状遺構である。出土遺物なし。

3 遺 物(第14図)

本地点からの出土遺物は、第1・2号住居址からのものがほとんどであり、遺構外からは、土師器、須恵器の小破片等が若干出土したのみであった。

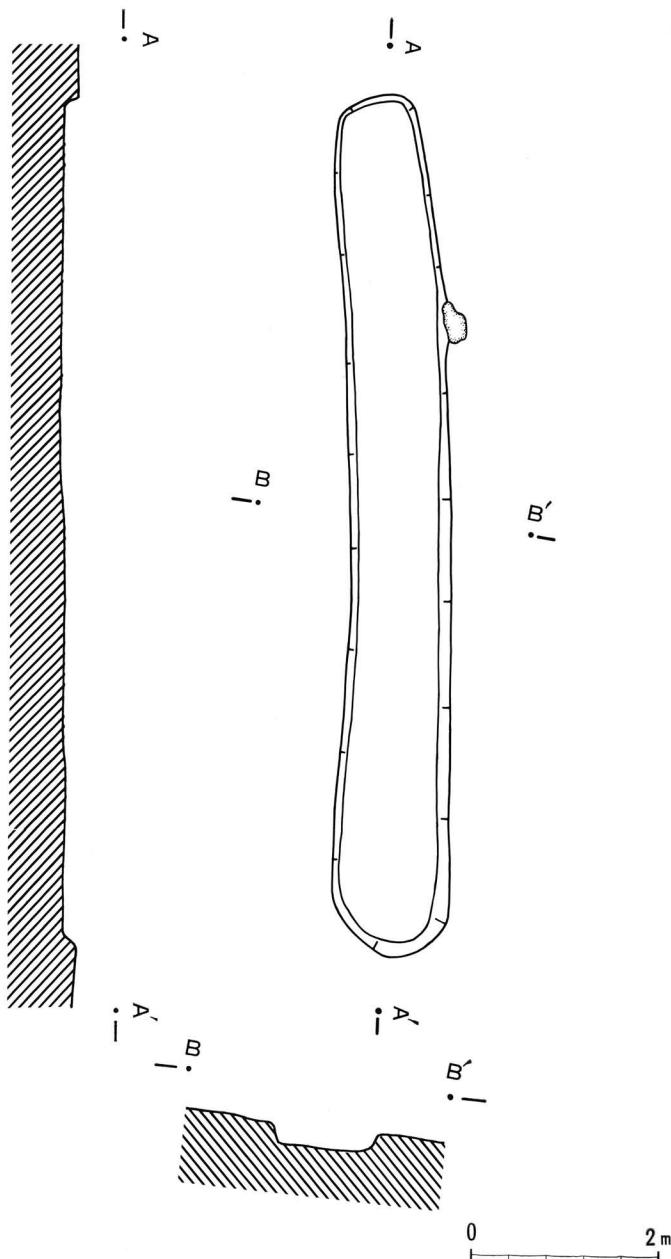
1は縄文時代中期加曾利E4式の土器片で、口唇直下に一条の沈線を巡らし、その直下より微隆帶による区画文が施されその間隙に縄文(RL)が施されている。

2～4は、土師器の胴張り甕の口縁部である。

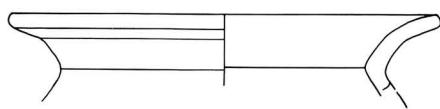
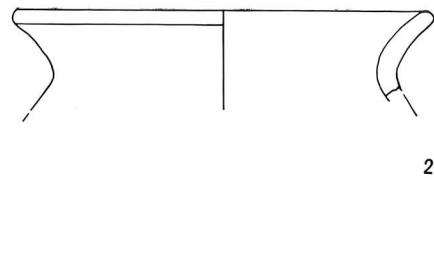
5は、土師器の長胴甕の底部で、外面縦方向、内面横方向の八ヶ目整形が施されている。底部は木の葉底である。

6は、須恵器の両耳甕の胴部片で、器内・外ともタタキ目が認められる。

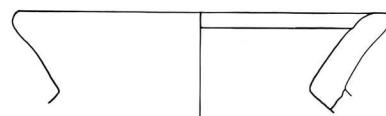
7は、須恵器の壺形土器の底部で糸切り痕が認められる。



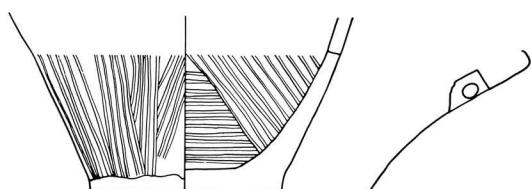
第13図 第1号溝状遺構図



3



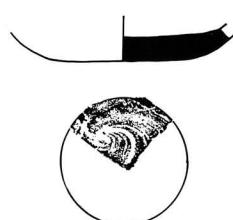
4



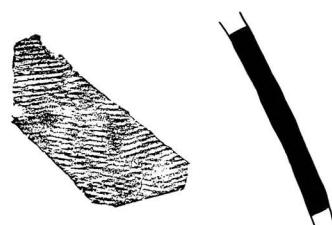
5



6



7



8



第14図 A区出土土器拓影・実測図

第2節 B地区の概要と成果

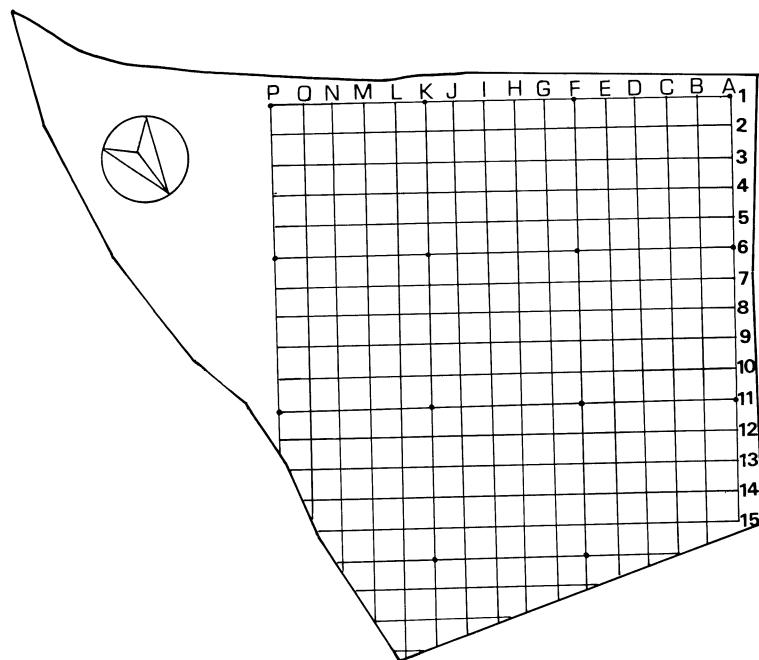
1 概 要

B地区は都留市つる四丁目1106—1番地に所在し、インターチェンジの建設用地として新たに買収された地点で、水田として利用されていた。

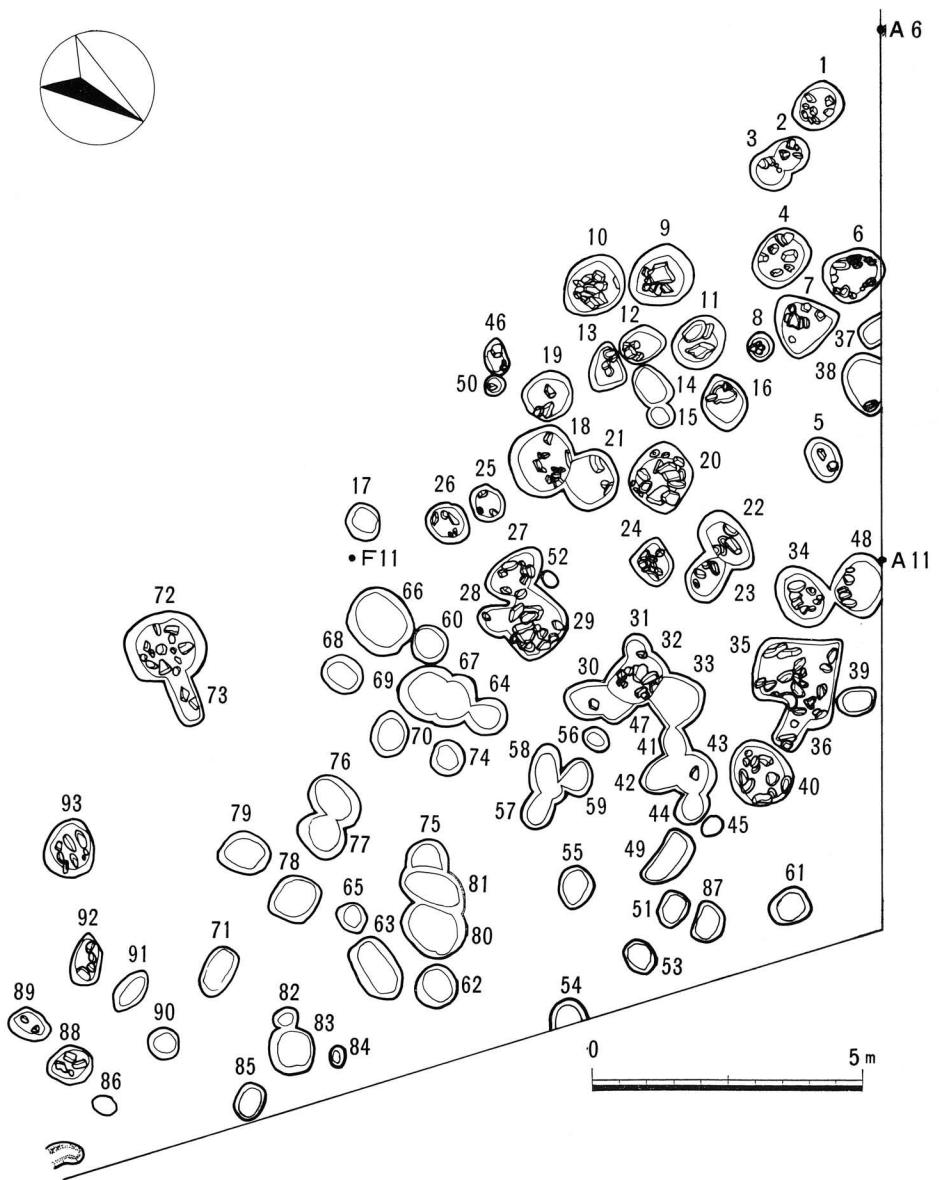
同地区の調査は第14図のように、グリッド法にて実施し、杭は2m毎に、東西方向にA～P、南北方向に1～19を設定した。

同地区は、基盤となる溶岩流までの土壌は薄く、特に、南西側（J～P—1～10グリッド付近）は、水田のマサ（鋤き床）、直下から溶岩が露出するようになった。遺構は、土壌層が厚い北東側（A～J—6～19グリッド付近）において集中的に認められ、遺物も第18図のように遺構の検出されたグリッドを中心に出土した。

本地区からは、第15図のように94基の小穴が検出され、これらは、複雑に重なり合った掘立柱建物址の柱穴址と思われる。本地区では5棟の掘立柱建物址の存在が想定された。遺物は同地区の長期的な利用を裏付けるように、9～10世紀代の遺物が検出された。



第15図 B地区グリッド配置図



第16図 B地区遺構配置図

2 遺 構

前述のとおり、本地区からは94基の小穴が検出された。小穴は第4表のように、平面形は円形または、不整円形、規模は径60cm～90cm、深さ25cm～40cmのものが多数を占めている。小穴内からは、遺物はほとんど認められなかった。

第4表 B地区ピット一覧表

(単位 cm)

遺構	平 面 形	長 径	短 径	深 さ	備 考
1	円 形	100	87	19.4	
2	"	60		25.5	東側でNo.3小穴と切り合う
3	"	70		33.5	西側でNo.2小穴と切り合う
4	"	106	100	29.3	
5	楕 圓 形	82	66	30.8	
6	不 整 圓 形	110	100	44.2	
7	"	114	110	35.8	
8	円 形	50	48	36.9	
9	不 整 圓 形	122	110	36.7	
10	円 形	116	104	50.1	
11	"	98	93	27.9	
12	不 整 圓 形	71	68	30.1	
13	不 整 形	90	69	49.6	
14	円 形	80	69	12.1	北側でNo.15小穴と切り合う
15	"	50		22.4	南側でNo.14小穴と切り合う
16	不 整 圓 形	89	73	43.4	
17	円 形	66	66	29.0	
18	不 整 圓 形	140	114	50.0	北側でNo.21小穴と切り合う
19	"	91	88	36.5	
20	"	113	112	59.5	
21	"	106	103	35.5	東側でNo.18小穴と切り合う
22	楕 圓	115	76	38.5	東側でNo.23小穴と切り合う
23	不 整 圓 形	(推定) 112	80	49.0	西側でNo.22小穴と切り合う
24	隅 丸 方 形	82	72	40.5	
25	不 整 圓 形	68	66	41.5	
26	不 整 方 形	75	70	45.0	
27	楕 圓 形	119	89	45.0	北側でNo.29小穴と切り合う
28	不 整 圓 形	60		30.5	西側でNo.29小穴と切り合う
29	不 整 方 形	122	120	13.0	東・南側でNo.27・No.28小穴と切り合う
30	不 整 圓 形		80	20.0	西側でNo.32小穴と切り合う
31	不 整 圓 形	53		23.0	北側でNo.32小穴と切り合う
32	楕 圓 形	157	92	44.5	南側でNo.32小穴と東側でNo.41小穴と切り合う
33	不 整 圓 形	50		14.5	
34	楕 圓 形	58	47	53.5	西側でNo.48小穴と切り合う
35	不 整 方 形	82	60	53.5	東側でNo.36小穴と切り合う
36	"	35	25	37.2	西側でNo.35小穴と切り合う
37	"	30	27	30.3	西側一部境界線に切られる
38	楕 圓 形	60	43	31.1	"
39	"	38	28	35.6	"

遺構	平面形	長径	短径	深さ	備考
40	円形	62	60	33.0	
41	楕円形	30	28	13.0	南西側でNo.35小穴と北東側でNo.42小穴と切り合う
42	"	40	33	23.0	西側でNo.43小穴と切り合う
43	"	50	43	22.5	南側でNo.41小穴と東側でNo.42小穴と北東側でNo.44小穴と切り合う
44	円形	28		25.5	南西側でNo.43小穴と切り合う
45	"	20		13.2	
46	楕円形	35	20	34.0	
47	不整円形	25	22	15.5	
48	円形	56	50	48.0	西側一部境界線で切られ、東側No.34小穴と切り合う
49	不整方形	56	32	40.0	
50	円形	18		29.0	
51	不整方形	35	28	22.2	
52	円形	15		20.0	
53	"	30		28.0	
54	"	37		33.5	北東側一部境界線に切られる
55	"	35		34.2	
56	"	30		12.4	東側でNo.59小穴と切り合う
57	不整円形	35	30	20.4	西側でNo.59小穴と切り合う
58	楕円	40	31	21.9	北側でNo.59小穴と切り合う
59	円形	23		16.5	西側でNo.56小穴と東側でNo.57小穴と南側でNo.58小穴と切り合う
60	"	36		21.3	
61	不整円形	36	33	39.5	
62	円形	41		20.0	
63	不整長方形	61	38	46.2	
64	円形	36		25.8	南東側でNo.67小穴と切り合う
65	"	25		20.7	
66	円形	63	58	37.2	
67	不整円形	53		32.5	北西側でNo.64小穴と南東側でNo.69小穴と切り合う
68	円形	35		29.8	
69	不整円形	55		33.0	北西側でNo.67小穴と切り合う
70	円形	40	36	38.8	
71	楕円形	47	25	39.0	
72	不整方形	75	65	28.1	北東側でNo.73小穴と切り合う
73	"	50	25	28.8	南西側でNo.72小穴と切り合う
74	円形	32		39.0	
75	楕円形	40	30	16.3	北東側でNo.81小穴と切り合う
76	"	53	37	25.8	東側でNo.77小穴と切り合う
77	"	47	37	28.7	西側でNo.76小穴と切り合う
78	不整方形	47	43	38.5	
79	不整円形	48	42	30.7	
80	"	58	52	35.2	南西側でNo.81小穴と切り合う 南西側でNo.75小穴と北東側でNo.80小穴と切り合う
81	楕円形	66	35	28.5	
82	"	27	18	28.7	北東側でNo.83小穴と切り合う
83	円形	45		36.3	南西側でNo.82小穴と切り合う
84	"	18		16.8	
85	"	32	30	41.7	
86	楕円形	23	20	22.7	
87	不整方形	38	26	39.0	

遺構	平 面 形	長 径	短 径	深 さ	備 考
88	橢 円 形	45	38	28.4	
89	"	37	30	29.1	
90	円 形	30		26.5	
91	橢 円 形	42	25	21.0	
92	"	46	28	26.0	
93	円 形	52		20.0	
94	不 整 方 形	38	26	39.0	



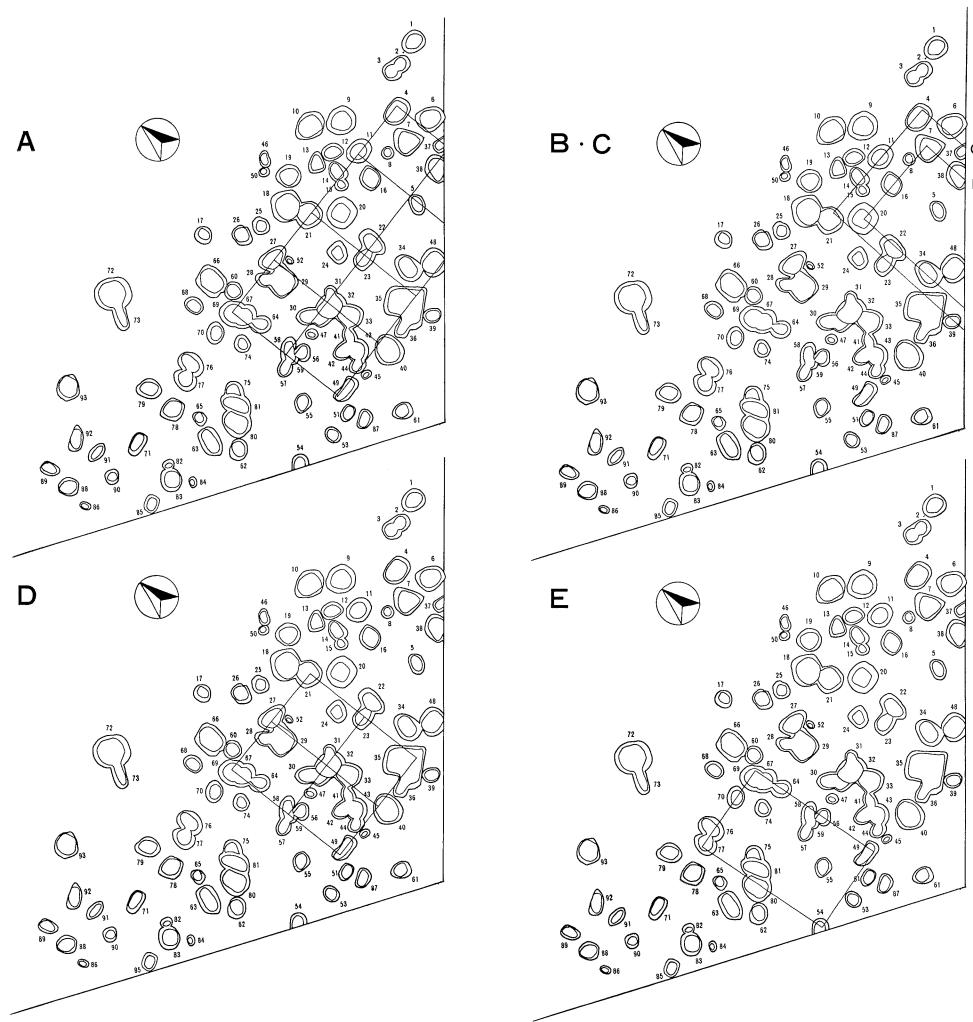
B区 挖立柱建物址柱穴址全景



B区 挖立柱建物址



B区 挖立柱建物址



第17図 B地区掘立柱式建物址想定図（1；100）

掘立柱式建物址（第16図）

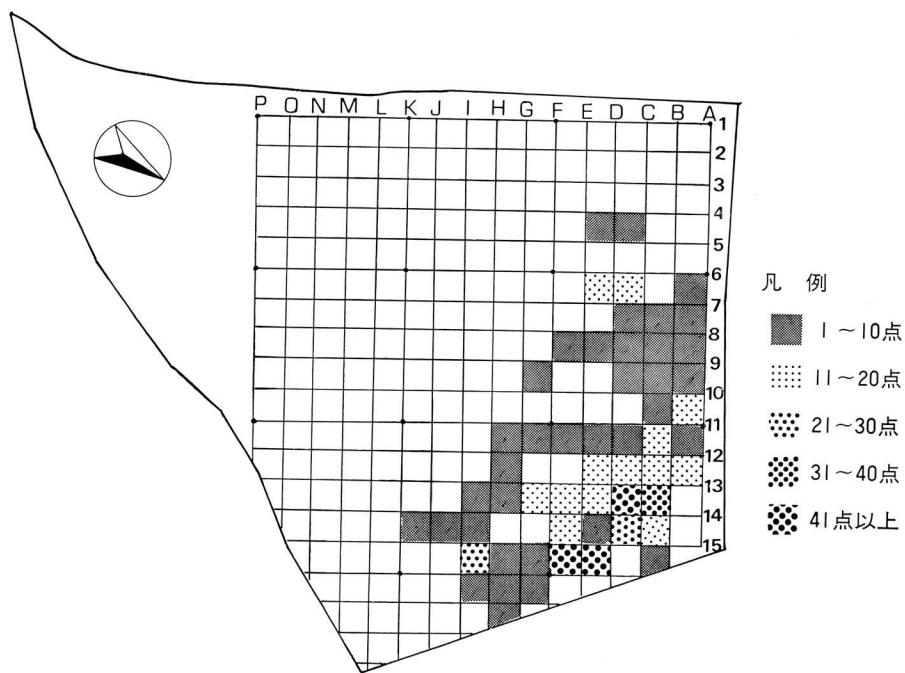
B地区からは、調査区南側に集中して94基の小穴が検出された。おそらく、その大半は掘立柱式建物址の柱穴として機能していたものと思われ、重複しているものも多く、時間差及びこのエリアが長期的に踏襲されてたことを物語るものと考えられる。しかしながら、小穴（群）の拡がりは調査区外へさらに延びる傾向を示しており、一応想定される建物址を5棟抽出してみたが、全体的には不明瞭であり、今後の課題である。

第5表 掘立柱式建物址一覧表

番号	間数(桁×梁)	規	模 (m)	主軸方向	備 考
A	4間×2間	P4+P11+P21+P27+P67=10.6 P67+P58+P49=5.6	東 西	総柱の建物	
B	3間以上×2間	P20+P22+P34=3.6	P7+P16+P20=4.0	南 北	
C	3間以上×2間	P21+P23+P36=5.5	P4+P11+P21=5.6	〃	Bの建替えか？
D	2間×2間	P21+P23+P35=5.6	P21+P27+P69=5.2	〃	総柱の建物
E	2間×1間	P71+P80+P54=5.9	P69+P77=3.4	〃	

3 遺 物

本地区からは、土師器壺を主体とする580点の遺物の出土を見た。遺物は小破片のものが大半であり、第18図のとおりに小穴周辺より出土した。



第18図 B地区遺物出土頻度図

第6表 B地区グリッド別出土土師器(壺)集計表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	計
A ラ イ ン	0	0	0	0	0	2	3	7	3	12	4	13	35	16	0	0	0	96
B "	0	0	0	0	0	0	1	2	1	2	11	18	35	14	1	0	0	85
C "	0	0	0	2	0	11	2	3	2	0	7	11	68	26	0	0	0	132
D "	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	8	0	18	3	42	0	0	73
E "	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	4	0	19	14	42	0	0	80
F "	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4	0	12	0	8	6	0	31
G "	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	9	1	0	9	2	2	27
H "	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	6	24	7	0	38
I "	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	5
J "	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	9	0	0	0	10
K "	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3

本地区より出土した遺物は、前述のとおり土師器の坏を主とし、若干の皿が認められた。これを時期別に区分すると次のようになる。

(1) 坏形土器

第1類 (第19図—1・3)

口唇部やや尖形を呈し、器内面・みこみに暗文を有するものである。

第2類 (第19図—2)

口唇部がやや丸味を有し、器体部下半に斜め箝削りが施されたもので、器内面に暗文を有するものである。

第3類 (第19図—4・5)

口唇部玉縁を呈し、器体部下半に斜め箝削りが施されたものである。

第4類 (第19~22図—6~31、38~45)

口縁部から器体部下半に至るまでヨコナデ整形が施されたものであり、底部は回転糸切り未調整のものである。

(2) 皿形土器

第1類 (第21図—33・34)

口唇部やや丸味を有し、器体部にゆるいくびれを有するものである。

第2類 (第22図—36・37)

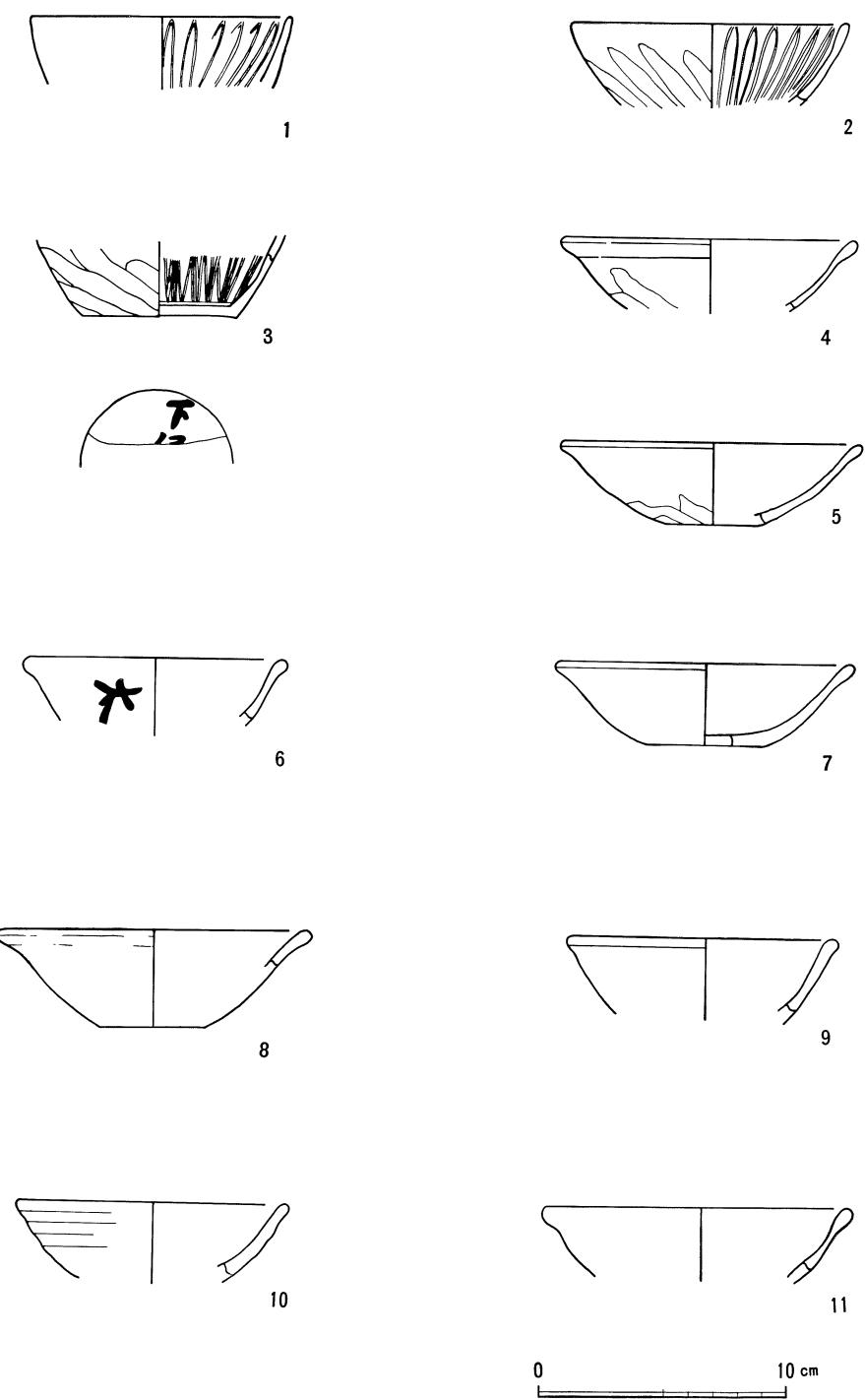
器肉の厚ぼったい小形皿で、底部は回転糸切り未調整のものである。

以上、坏形・皿形に分け、時期別に大別した。これに、年代を与えると、坏第1・2類は9世紀中葉から後半に、同第3・4類は10世紀後葉から11世紀初頭に、また、皿第1類は10世紀前半に、同第2類は、11世紀後半に、それぞれ位置付けられるものと思われる。

第7表 B地区出土土器一覧表

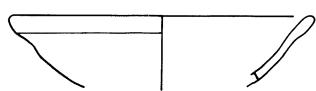
(単位 cm)

No	出土グリッド	法 量	整 形	胎 土	色 調	備 考
1	C — 13	(口径) 約11.4	ロクロ横ナデ、器内面花弁状暗文	よく精選されて緻密	茶褐色	
2	D — 4	(口径) 約11.2	器体部下半斜行箝削り 器内面花弁状暗文	赤色粒を若干含有	赤褐色	
3	E — 13	(底径) 約 6.0	器体部下半斜行箝削り 器内面・みこみ部暗文	砂粒少なく緻密である	"	墨書き土器
4	C — 14	(口径) 約11.9	器体部下半斜行箝削り	"	茶褐色	
5	E — 13	(") 約12.1	"	"	"	
6	C — 13	(") 約10.6	ロクロ横ナデ	赤色粒を若干含有	"	墨書き土器
7	B—12, E—15	(口径) 約12.0 (底径) 約 4.7 (器高) 約 2.3	"	"	"	

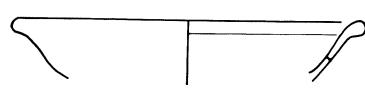


第19図 B地区出土土器実測図 (1)

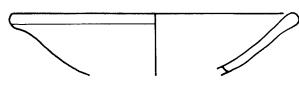
No.	出土グリッド	法 量	整 形	胎 土	色 調	備 考
8	C — 13	(口径) 約12.7	ロクロ横ナデ	赤色粒含有	赤褐色	
9	E — 15	(〃) 10.9	〃	〃	〃	
10	〃	(〃) "10.9	〃	〃	褐 色	
11	〃	(〃) "12.4	〃	〃	赤褐色	
12	A — 12	(〃) "12.0	〃	黑色細粒を若干含有	〃	
13	C — 13	(〃) "14.1	〃	よく精選されて緻密	茶褐色	
14	A — 8	(〃) "11.4	〃	〃	赤褐色	
15	A — 11	(〃) "11.5	〃	砂粒を若干含有	〃	
16	B — 11	(〃) "11.6	〃	〃	〃	
17	B — 14	(〃) "10.5	〃	〃	〃	
18	B — 12	(〃) "12.8	〃	精選されて緻密	茶褐色	
19	A — 13	(〃) "12.8	〃	〃	赤褐色	
20	〃	(〃) "14.5	〃	黑色細粒を若干含有	茶褐色	
21	〃	(〃) "14.1	〃	精選されて緻密	赤褐色	
22	B — 14	(〃) "12.6	〃	〃	〃	
23	C — 12	(〃) "13.9	〃	〃	〃	
24	〃	(〃) "11.6	〃	〃	〃	
25	A — 14	(〃) "13.9	〃	〃	茶褐色	
26	B — 11	(〃) "12.6	〃	〃	赤褐色	
27	B — 12	(〃) "12.8	〃	〃	茶褐色	
28	A — 10	(〃) "11.8	〃	砂粒若干含有	赤褐色	
29	C — 6	(〃) "12.4	〃	〃	茶褐色	
30	B — 12	(〃) "10.9	〃	精選されて緻密	〃	
31	C — 6	(〃) "12.6	〃	〃	〃	
32	C — 13	(〃) "13.3 (底径) " 5.8 (器高) " 3.4	〃	小砂粒を若干含有	〃	墨書き器 「矢」



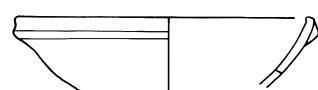
12



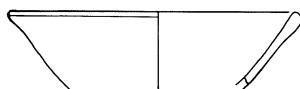
13



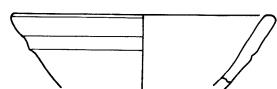
14



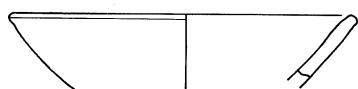
15



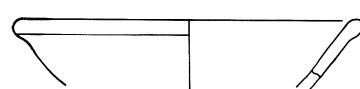
16



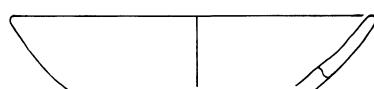
17



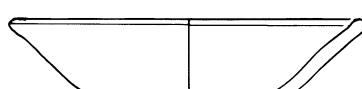
18



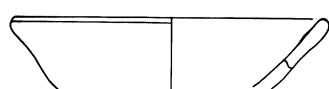
19



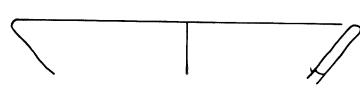
20



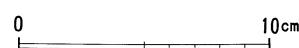
21



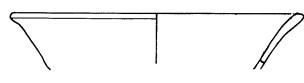
22



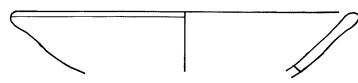
23



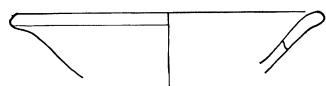
第20図 B地区出土土器実測図 (2)



24



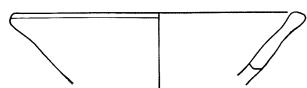
25



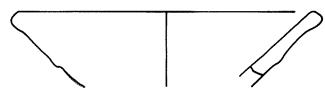
26



27



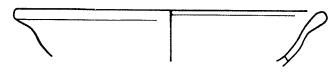
28



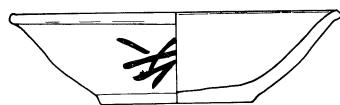
29



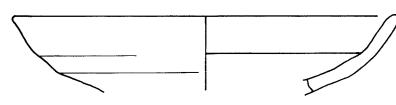
30



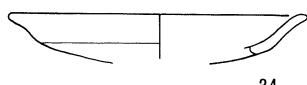
31



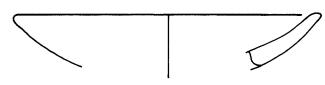
32



33



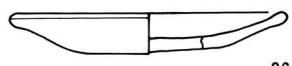
34



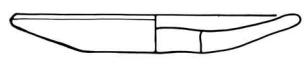
35



第21図 B地区出土土器実測図 (3)



36



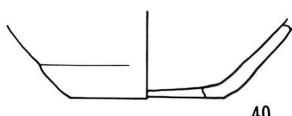
37



38



39



40



41



42



43



44

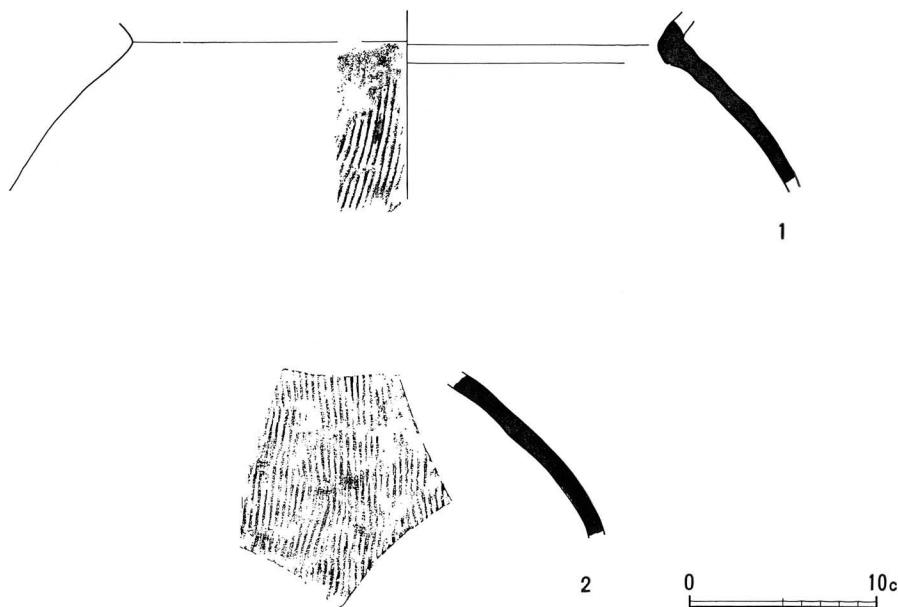


45

0 10 cm

第22図 B地区出土土器実測図 (4)

No.	出土グリッド	法量	整形	胎土	色調	備考
33	D — 15	(口径) 約15.4	ロクロ横ナデ	赤色粒を若干含有	赤褐色	
34	"	(") " 11.9	"	"	茶褐色	
35	A — 13	(") " 12.3	"	小砂粒含有	赤褐色	
36	F — 15	(") " 11.0	(器体部) " (底部) 回転糸切り未調整	精選されて緻密	茶褐色	
37	C — 13	(") " 11.6 (器高) " 1.5	"	"	"	
38	G — 12	(底径) " 6.0	(底部) 回転糸切り未調整	"	"	墨書き土器
39	G — 16	(") " 6.2	(") "	"	"	スズリとして使用
40	D — 15	(") " 6.1	(") "	"	"	
41	"	(") " 5.5	(") "	"	"	
42	"	(") " 5.3	(") "	"	黒褐色	
43	C — 13	(") " 4.6	(") "	"	茶褐色	
44	D — 15	(") " 5.2	(") "	"	(内) 黒褐色 (外) 茶褐色	
45	G — 16	(") " 5.0	(") "	"	茶褐色	



第23図 B地区出土土器実測図

第3節 C地区の概要と成果

1 概 要

C地区は、都留市つる四丁目1112—1番地に所在し、インターチェンジの建設用地として新たに買収された地点で、畠として利用されていた。

同地区的調査は、昭和58年2月21日から昭和58年3月10日まで実施され、ピットや溝状遺構が検出された。これらの内、ピット群は掘立柱建物址の存在を物語るもので、同地区では2棟の掘立柱建物址が想定されている。出土遺物は、歴史時代の土器片が少量出土した。



C地区全景

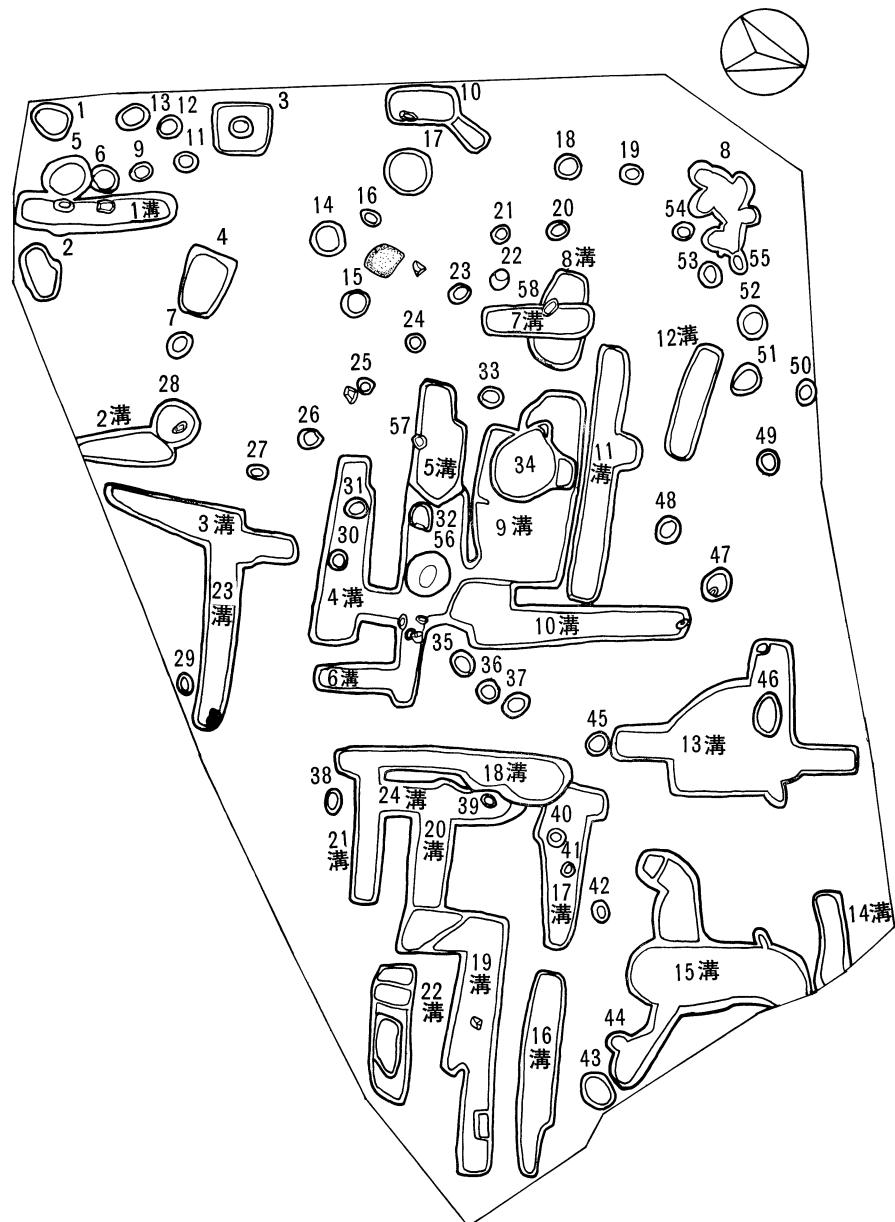
2 遺 構

本地区では、54基のピット、24基の溝状遺構が検出され、これらの内、ピットは掘立柱建物址の柱穴址と考えられるものであり、2棟の掘立柱建物址の存在が想定された。

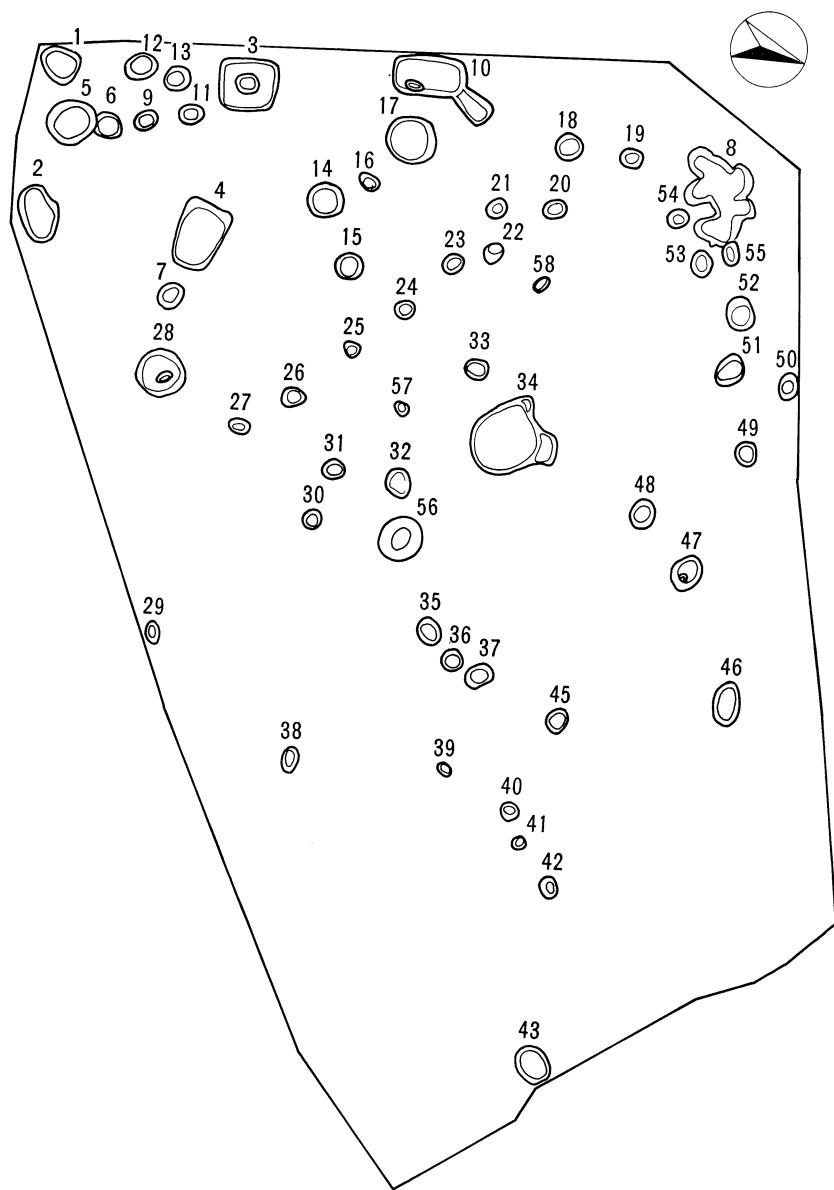
しかしながら、掘立柱建物址、溝状遺構とも出土建物は少なく、時期の推定は困難であった。また、ピットと溝状遺構との関連も不明瞭であった。

(1) ピット

54基のピットが検出されている。その大半は柱穴として機能していたものと想定されるが、限定された調査面積も手伝って、全体のピット間の関連性を明確に捉えることは困難で、調査区西側のピット群から2棟の掘立柱式建物址を想定したにすぎない。ピットの分布状況から察するに、西側の調査区外へさらにピットが拡がっているものと思われる。



第24図 C地区遺構配置図



第25図 ピット配置図

第8表 C地区ピット一覧表

(単位 cm)

造構No.	平面形	長径	短径	深さ	備考
1	不整橢円	80.0	60.0	16.5	
2	不整長橢円	106.0	68.0	37.0	
3	不整方形	112.0	90.0	21.0	中央に深34.0のピットをもつ
4	"	90.0	66.0	52.0	中央に高28.0の嶺状凸部をもつ
5	不整円形	90.0		39.5	
6	不整橢円	56.0	46.0	26.0	
7	"	50.0	40.0	27.5	
8	最長軸 226.0			36.0	不整円或は不整橢円 7～8 の集合
9		44.0		13.0	
10	長方形	134.0	74.0	55.2	11.0cmの台状部分あり、長55cm幅15～20cmの突起部をもつ
11	ほぼ円	40.0		25.0	
12	橢円	56.0	46.0	15.0	
13	ほぼ円	40.0		14.5	
14	"	62.0		24.5	
15	"	50.0		28.0	
16	橢円	60.0	40.0	11.0	
17	ほぼ円	90.0		40.5	
18	"	46.0		16.5	
19	橢円	40.0	34.0	24.0	
20	"	42.0	36.0	32.0	
21	ほぼ円	34.0		17.0	
22	"	36.0		43.0	
23	橢円	40.0	34.0	23.0	
24	ほぼ円	34.0		21.0	
25	"	28.0		20.0	
26	橢円	42.0	36.0	14.5	
27	"	34.0	26.0	30.5	
28	ほぼ円	90.0		49.5	No.2ピットと接している。
29	"	32.0		24.0	
30	橢円	40.0	36.0	22.0	No.4ピットの中にある。
31	ほぼ円	40.0		22.0	"
32	不整橢円	94.0	78.0	6.5	"
33	ほぼ円	30.0		10.5	
34	不整円形	160.0		41.0	円と不整方形の合体した形、No.9ピットの中にある。

遺構No.	平面形	長径	短径	深さ	備考
35	楕円	50.0	44.0	30.5	
36	ほぼ円	42.0		32.5	
37	楕円	50.0	40.0	22.0	
38	長楕円	44.0	28.0	20.0	
39	"	30.0	18.0	12.0	No.20ピットの中にある。
40	ほぼ円	32.0		28.0	No.17ピットの中にある。
41	"	32.0		26.5	"
42	楕円	36.0	32.0	14.0	
43	ほぼ円	74.0		33.0	
44	"	40.0		32.0	No.15ピットの中にある。
45	"	40.0		15.0	
46	不整楕円	82.0	50.0	18.0	No.13ピットの中にある。
47	ほぼ円	60.0		20.5	
48	"	50.0		37.5	
49	楕円	48.0	42.0	26.5	
50	ほぼ円	40.0		25.0	
51	不整楕円	64.0	56.0	28.5	
52	ほぼ円	60.0		24.5	
53	"	46.0		20.0	
54	楕円	38.0	34.0	15.5	



C区 ピット群（1号掘立柱址）



C区 ピット群（2号掘立柱址）

1号掘立柱式建物址

基本的には5間×3間の建物址が想定されるが、南側の桁柱列に対応する北側の桁柱は検出されていない点、若干疑問が残る。しかし、深柱はうまく対応し、東・西・南の柱穴は柱筋が通る。規模は、南側の桁柱間は、東から $1.35m + 1.35m + 1.95m + 1.35m + 1.75m = 7.75m$ 、北側桁柱間は $8.10m$ 。梁柱間は東側で、南から $1.55m + 1.80m + 1.75m = 5.10m$ 、西側では、南から $1.45m + 2.20m + 1.65m = 5.30m$ 、面積は約 $41.2m^2$ を測る。

また、P-36・48・49は北側の桁と平行しており、外縁であろうか。P-27・30も建物址に付属するのかもしれない。

出土遺物はなく、時期を決めかねるが、おそらく歴史時代以降中近世の所産と思われる。

2号掘立柱式建物址

P-3・4・28の柱筋が通り、P-3から北へ90度ふった所にP-7が位置する。いずれもしっかりとした掘り方で、P-3・7・38からは柱のアタリが検出されている。規模は、P-3からP-28のアタリまで $5.80m$ を測り、P-3からP-7のアタリまで $3.25m$ を測る。柱穴間の距離が広すぎる感があるが、一応規則性が認められ、P-1・2との関連も想定され、建物址としてあつかった。調査区外へ延びるのであろうか。時期も含め詳細は不明である。

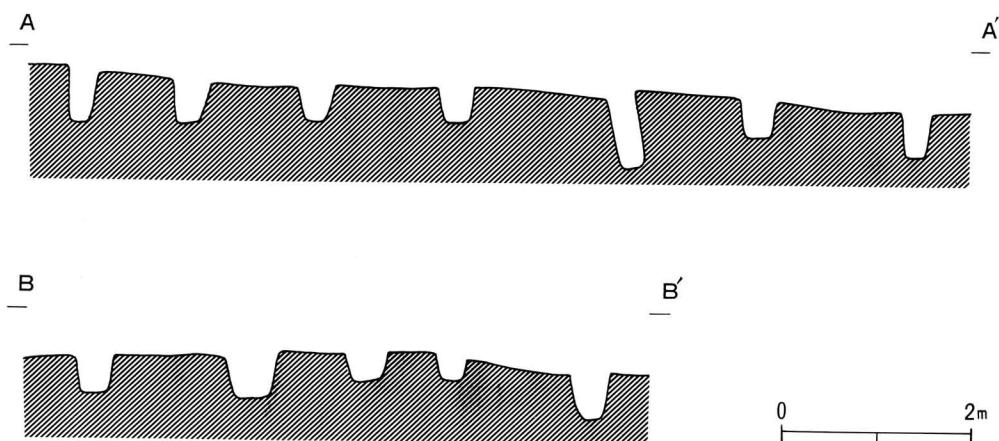
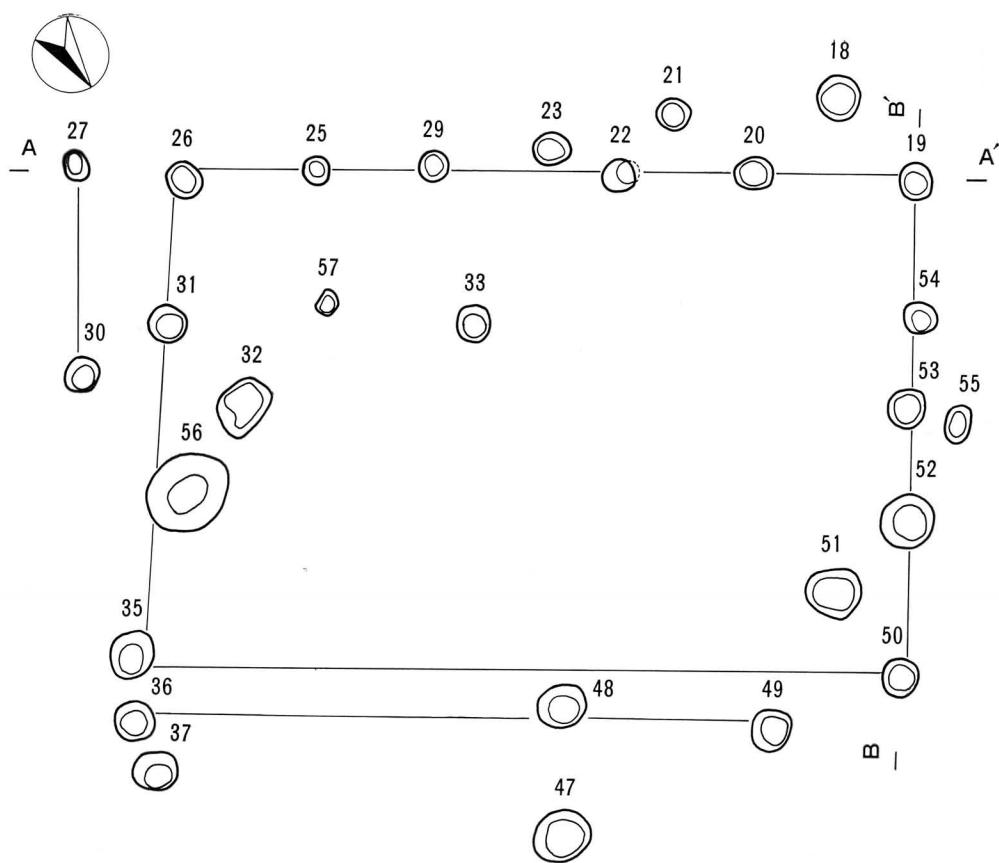
(2) 溝状遺構

24基検出された。重複するものも見られ、時期差があることを物語っている。およそ主軸を東西方向に持つものと、南北方向に持つものの二者に大別される。構築時期・機能など詳細不明である。

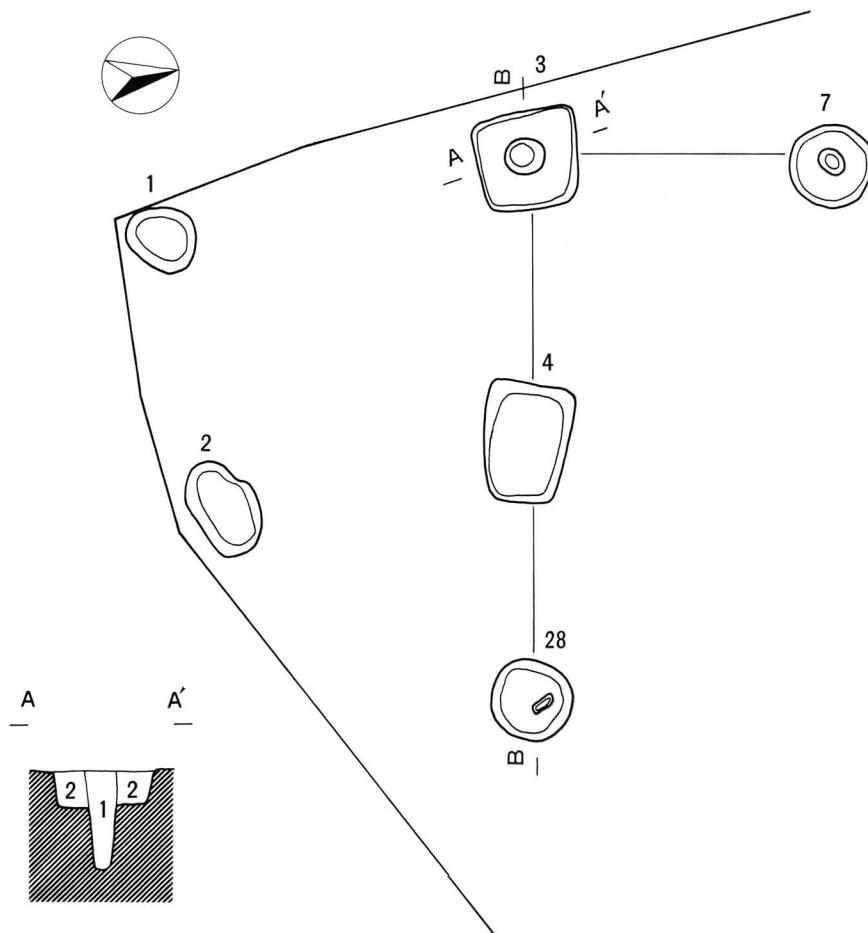
第9表 C地区溝状遺構一覧表

(単位 cm)

No.	最大幅	長さ	深さ	主軸	No.	最大幅	長さ	深さ	主軸
1	66.0	294.0	35.5	南北方向	13	176.0	256.0	27.5	南北方向
2	72.0	168.0	31.5	"	14	60.0	172.0	43.0	東西方向
3	74.0	390.0	39.5	"	15	130.0	350.0	42.0	南北方向
4	54.0	356.0	24.5	東西方向	16	74.0	392.0	37.0	東西方向
5	130.0	610.0	34.0	南北方向	17	106.0	308.0	26.5	"
6	60.0	194.0	33.0	"	18	100.0	430.0	54.0	南北方向
7	100.0	188.0	39.5	"	19	100.0	495.0	39.5	東西方向
8	60.0	204.0	37.5	東西方向	20	84.0	252.0	31.5	南北方向
9	200.0	370.0	34.5	"	21	52.0	258.0	36.5	"
10	132.0	448.0	27.0	南北方向	22	80.0	260.0	31.0	東西方向
11	104.0	486.0	37.0	東西方向	23	69.0	410.0	22.0	"
12	64.0	226.0	65.0	"	24	62.0	310.0	30.0	南北方向

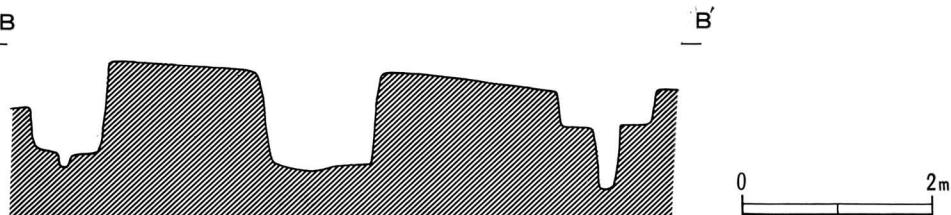


第26図 1号掘立柱建物址



土層：

- 1 黒褐色土
- 2 明黒褐色土(1~2mm大のスコリアを混入)



第27図 2号掘立柱建物址



C地区 溝状遺構全景



4～12号溝状遺構



13号溝状遺構



17・18・20・21・24号溝状遺構



3・4号溝状遺構



16・19・22号溝状遺構

(3) 遺物

本地区からは歴史時代の土師器や須恵器の破片が少量出土している。しかし、いずれも小破片のみで全体の器形を窺い知れるものはなかった。破片からの観察では、土師器は口縁部が玉縁状を呈する壺がみられ、底部破片のなかには箝削り整形のものが認められた。須恵器は、甕形を呈するものがほとんどを占め、器面には叩き目が認められ、自然釉が付着しているものもみられた。

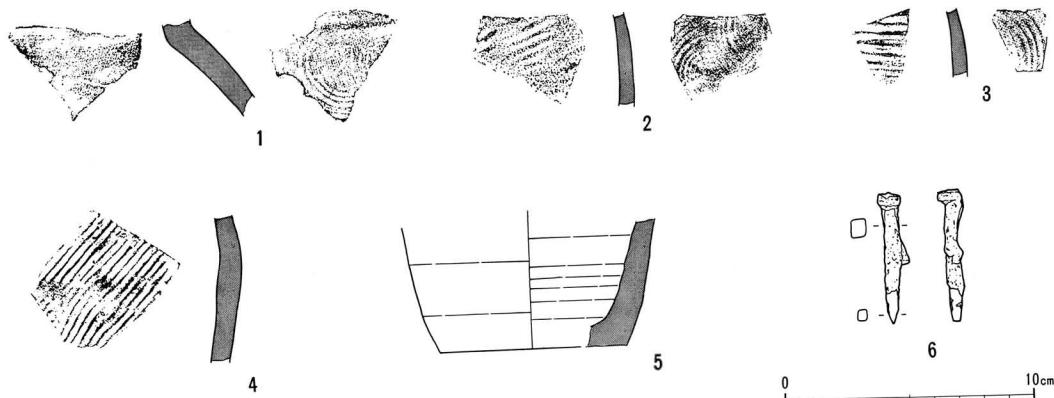
他の時代の遺物としては、中近世に属すると思われる陶磁器の小破片が数点得られたが、痛んでおり、産地などは不明である。

須恵器（第28図 1～5）

1～4は甕の胴部破片で、2・3の外面には平行叩き目が、1～3の内面には同心円状の叩き目が認められ、4の内面の叩き目はナデ消されている。2のみP-4出土、他は表土出土である。5は瓶の底部破片で、底径7.4cmを測る。表土出土。

釘（第28図 6）

金属製品が1点出土している。いわゆる角釘と呼ばれるもので、腐蝕が著しい。断面は長方形を呈し、長さは5.8cmを測る。表土出土。

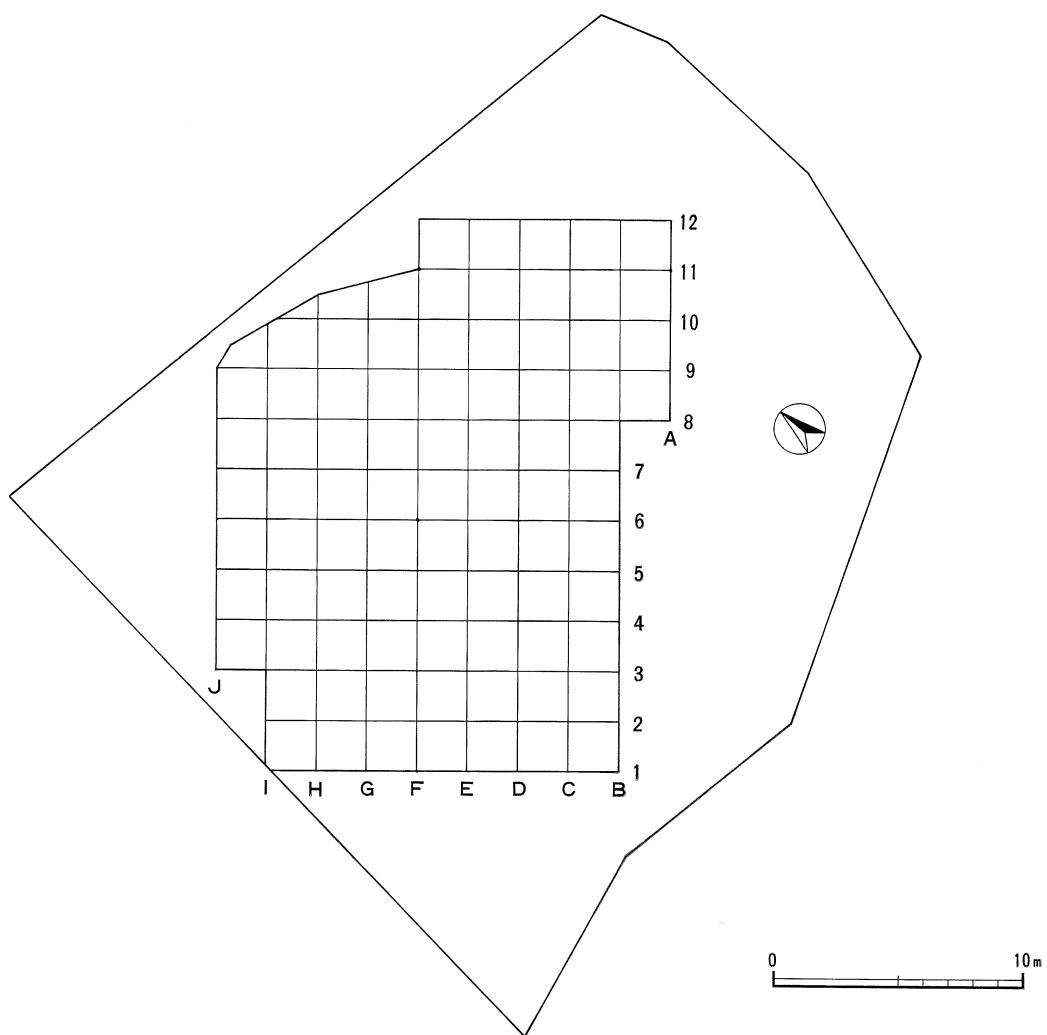


第28図 C地区出土遺物

第4節 D地区の概要と成果

1 概 要

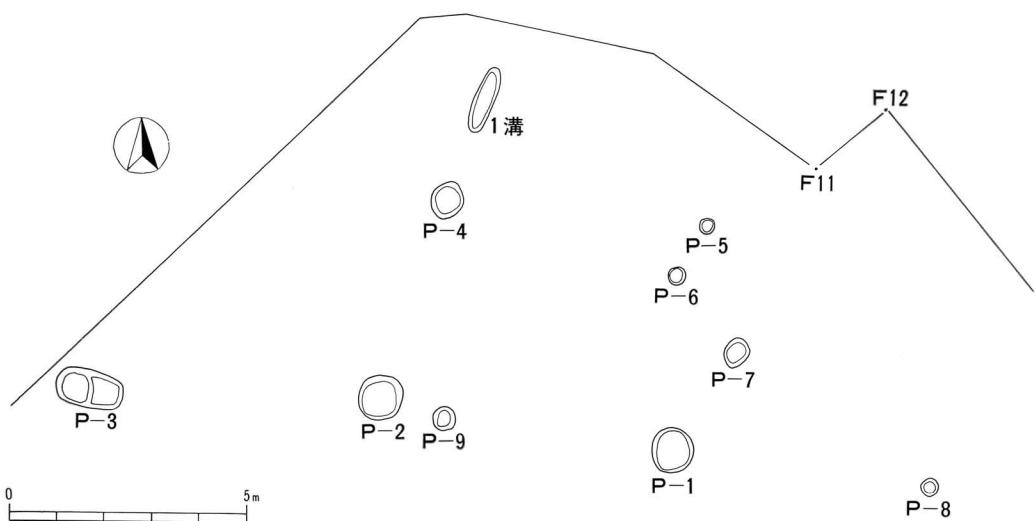
D地区は、都留市つる四丁目1176番地に所在する。本地区はインターチェンジ建設用地として新たに買収されていた地区で、畑として利用されていた。調査は昭和58年5月30日～同年6月30日まで実施され、ピット9基、溝状遺構1基が検出された。ピット・溝状遺構とも北西側の調査対象地区外に拡がりを持つものと思われ、ピット群、溝状遺構の全様を知るには至らなかった。



第29図 D地区グリッド配置図

D地区全景

(北東方向
より写す)



第30図 D地区遺構配置図

2 遺 構

本地区からは、第28図のように、ピット9基、溝状遺構1基が検出された。各遺構の概要は第10表のとおりである。

第10表 D地区遺構一覧表

(単位cm)

遺構	平面形	長径	短径	壁高	備考
ピット1	円形	47		31.5	
" 2	"	48		28.5	
" 3	楕円形	143	63	47.5	

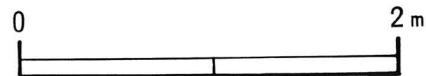
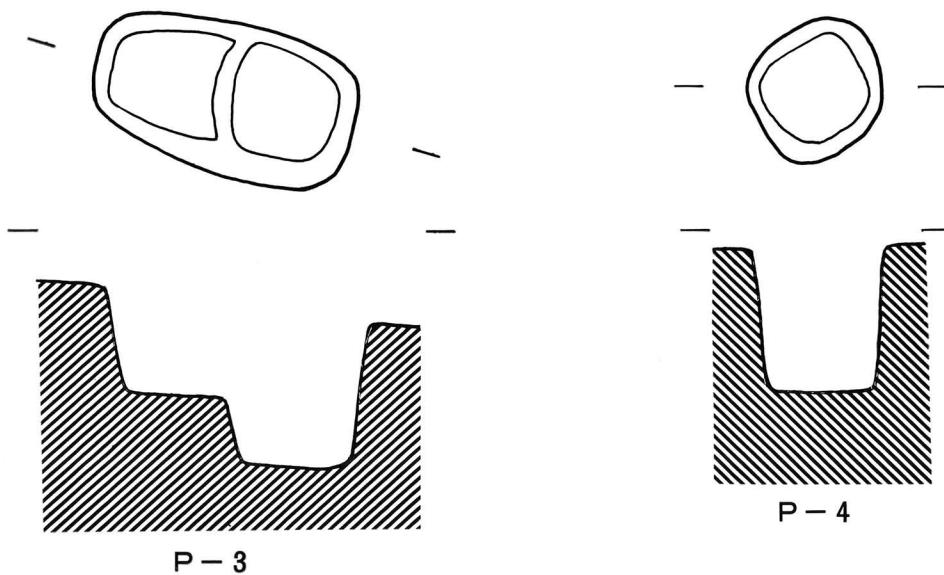
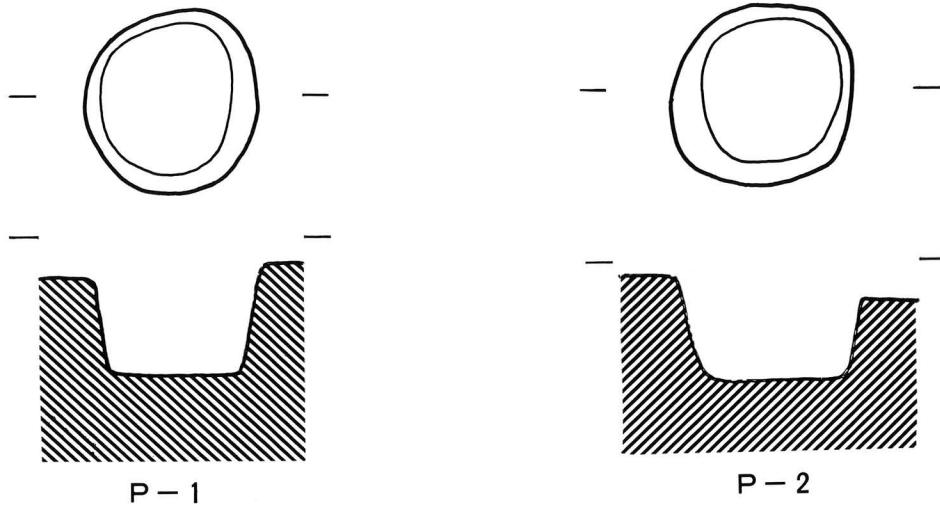
遺構	平面形	長径	短径	深さ	備考
ピット 4	円形	35.0		41.5	
" 5	"	17.0		22.0	
" 6	"	20.0		15.5	
" 7	不整円形	30.0		25.0	
" 8	円形	20.0		23.0	
" 9	"	25.0		22.0	
溝 1	長楕円形	73.0	(幅) 22.0	22.0	(主軸)南北方向

第1・5・6
7号ピット近
景
(北側より写
す)

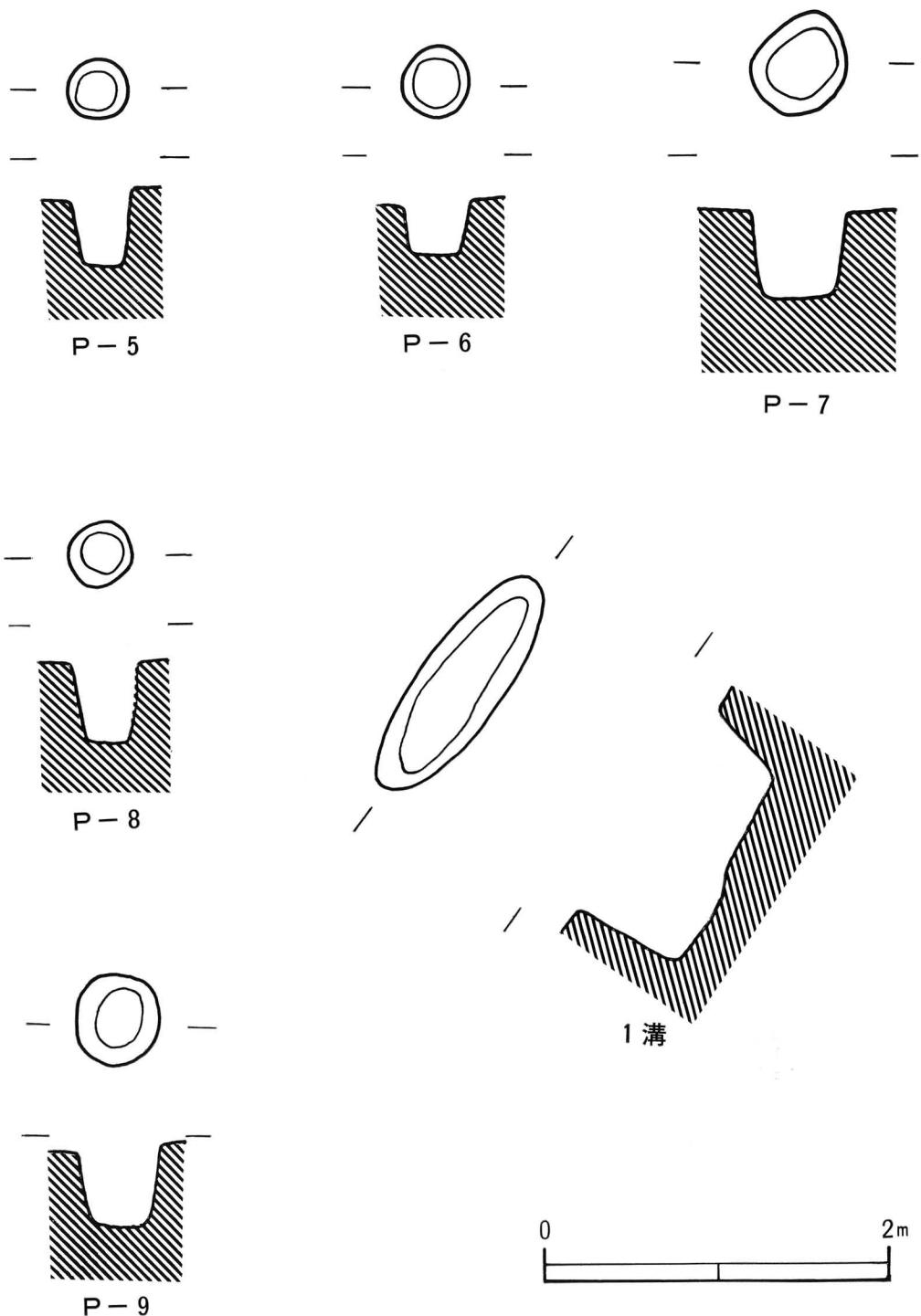


第2・4・9
号ピット、第
1号溝状遺構
(北側より写
す)





第31図 D地区遺構図 (P 1～P 4)



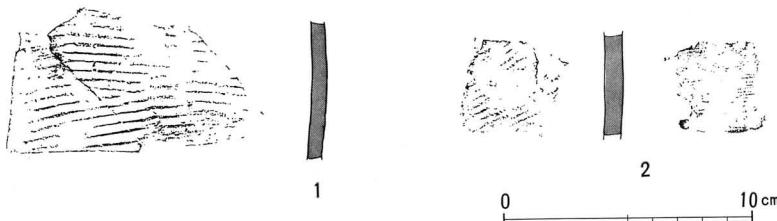
第32図 D地区遺構図 (P 5～P 9 + 1溝)

3 遺 物

本地区からは、出土遺物として、歴史時代の土師器・須恵器が少量出たのみで、器形が窺い知れるような遺物は皆無であった。土師器は、坏の小破片が主体をなし、9世紀後半～10世紀代に位置付けられるものであった。須恵器は甕の破片がわずかに出土した。第33図1・2とも甕の胴部破片で、叩き目（1は平行、2は繊維）によって整形が施されている。

第11表 D地区出土遺物一覧表

No.	種別	整 形	胎 土	色 調	出土グリッド
1	須恵器・甕	(外)平行叩き目(内)ナデ	白色粒若干含有	灰 白 色	G—6
2	" "	" "	"	"	表 土



第33図 D地区出土遺物

D地区全景
(南西方向より写す)



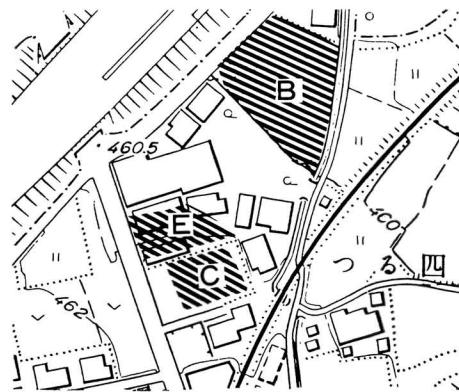
第5節 E地区の概要と成果

1 概 要

E地区は、都留市つる四丁目1111—7・8・11番地に所在し、インターチェンジの建設用地として新たに買収された地点で、宅地として利用されていた。

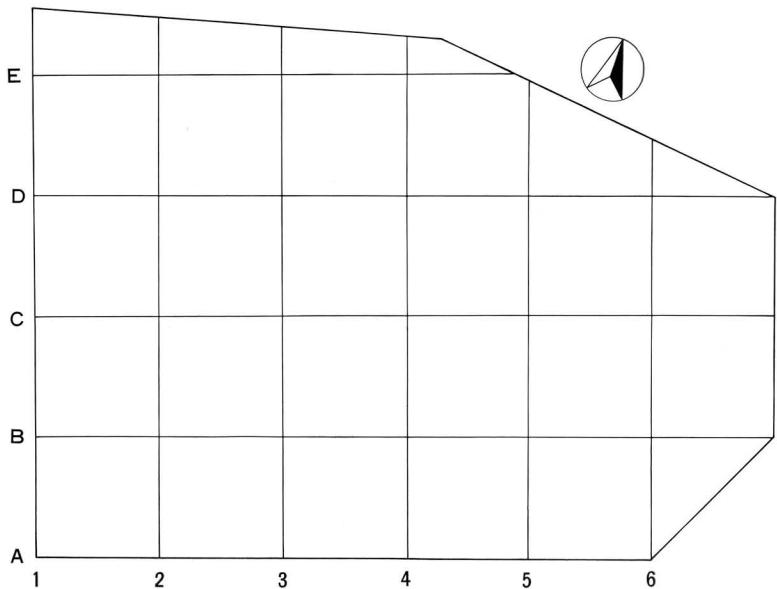
同地区的調査は、4m毎に、東西方向（県道谷村・宝線側より）に1～7、南北方向にA～E杭を設定し、グリッド毎に調査を進めた。調査は昭和58年7月1日より開始し、歴史時代の住居址2軒、ピット39基、溝状遺構11基を検出し、同年9月31日に終了した。

第34図 E地区位置図



第35図 E地区グリッド

設定団



E地区 近景

(南側より写す)



E地区 調査風景

(東側より写す)

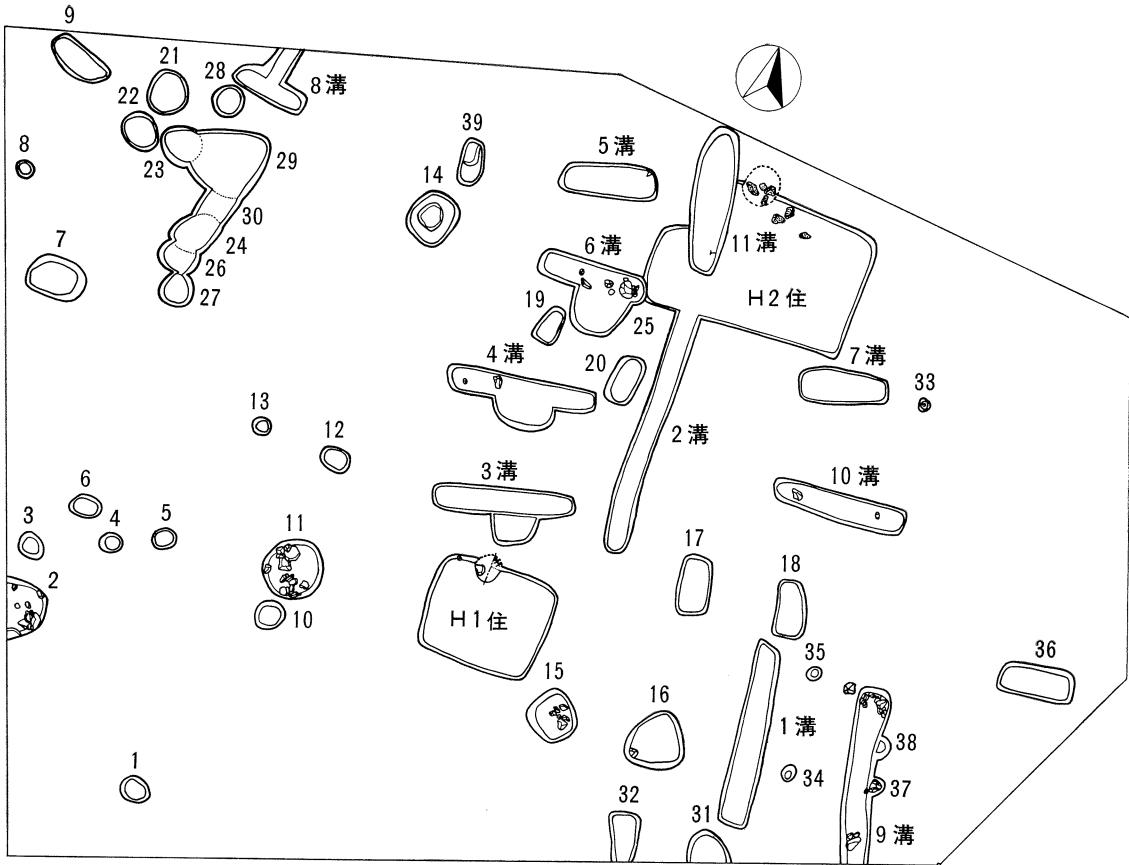


2 遺構

本地区では、前述のとおり、歴史時代の住居址2軒、ピット39基、溝状遺構11基が検出された。

これらの内、住居址1・2号住居址は、両者とも一辺2~4mの小規模なものであり、床・掘り込みとも、しっかりしたものとはいいがたい住居址であった。両者の住居址は、出土遺物より、10世紀後半に位置付けられるものと思われる。

ピット群は、掘立柱建物址の柱穴址と思われるが、建物の想定は不可能であった。溝状遺構は出土遺物もなく、時期は不明であるが、覆土の観察より、住居址・ピット群より新しい時期の所産と思われる。



第36図 E地区遺構配置図

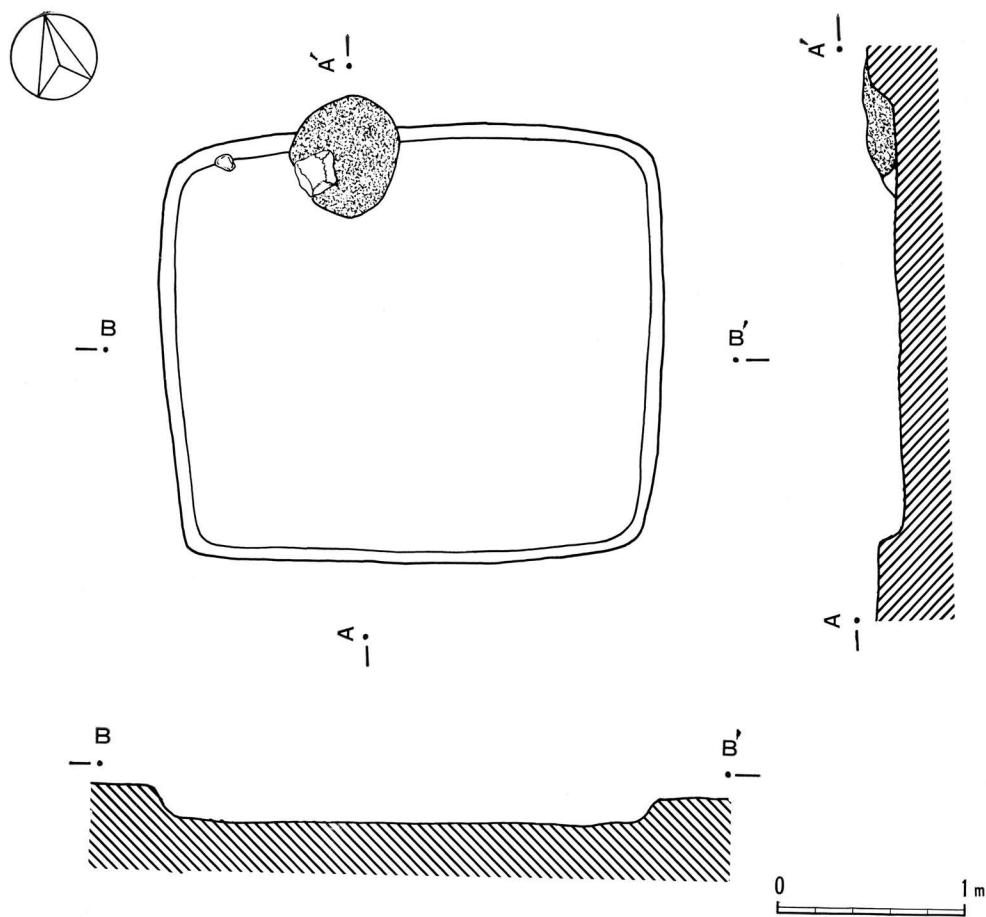
(1) 住居址

1号住居址

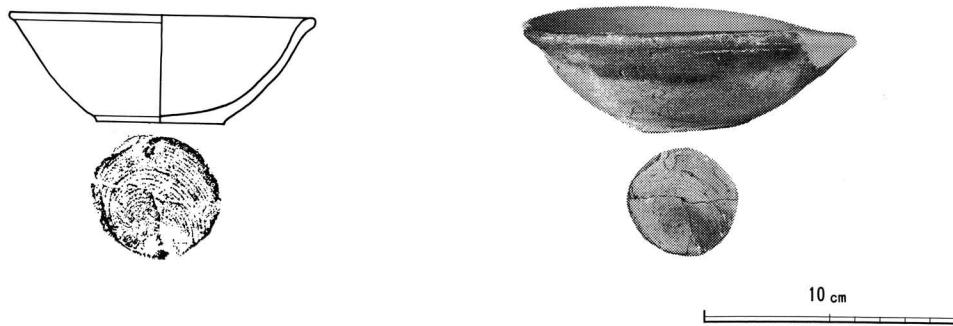
A・B—3 グリッドに位置し、南北(主軸方向)約2.1m、東西約2.65m の方形プランを呈する住居址で、壁高は約15cmを測る。床面は軟弱であり、カマドも焼土甕としてのみ確認された。

出土遺物は、少量で、土師器は壊、須恵器は甕の破片がわずかに認められたのみであった。

第35図は、ほぼ完形品に近い状態で出土したもので、口縁部やや丸味を有する壊形土器で、底部にわずかに高台部を創出している。底部は回転糸切り未調整のものである。法量は、口径12cm、底径5cm、器高4.3cmであった。



第37図 1号住居址遺構図



第38図 1号住居址出土遺物

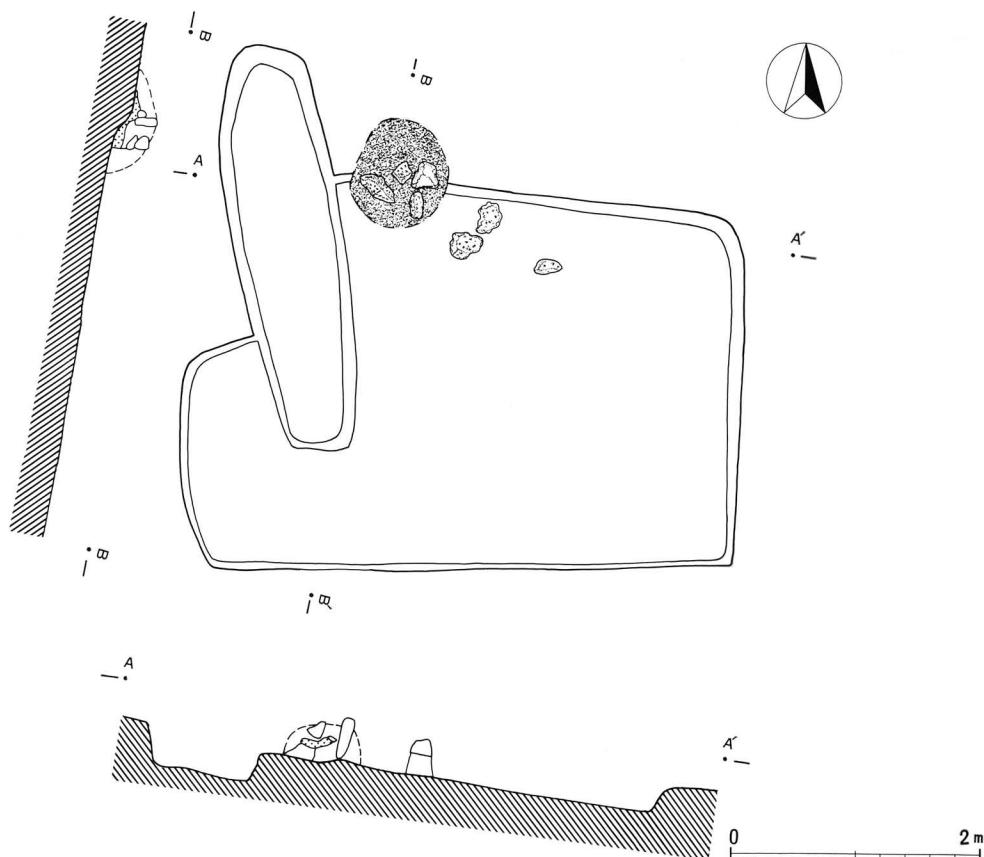
2号住居址

C・D-3・4グリッドに位置し、南北(主軸方向)約3.06m、東西約4.45mの長方形プランを呈する住居址で、壁高は約20cmを測る。床面は平坦であるが、軟弱であり、住居址西側を11溝によって切られている。カマドは、東側の袖石が2個認められたが、西側は抜き取られていた。

出土遺物は、土師器壊・甕の小破片が主体であり、図上復元ではじめて、器形を窺い知れるものが大半であった。

第40図—1～9は、口縁部玉縁を呈する土師器の壊で、1～4はナデにより、5～9は器体下部に斜め箇削りにより、それぞれ整形されている。

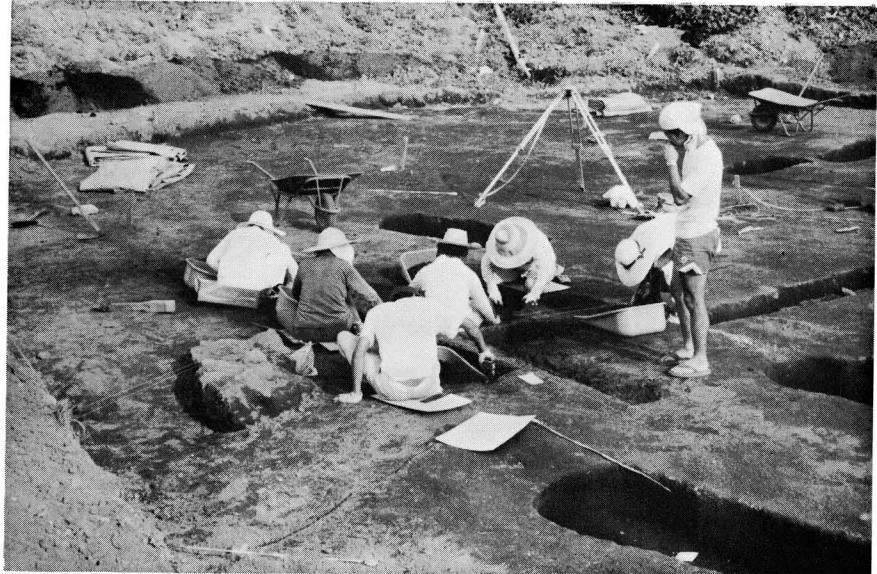
第41図—10～12は、口縁部が肥厚し、「く」の字状に外反した土師器の甕で、10～12ともに外面縦方向、内面横方向のハケ目整形が施されている。



第39図 2号住居址遺構図

2号住居址調査風景

サブトレンチを設定し床面・壁の確認作業に当たる。



2号住居址調査風景

図面を取りながらカマドを十字に切る。

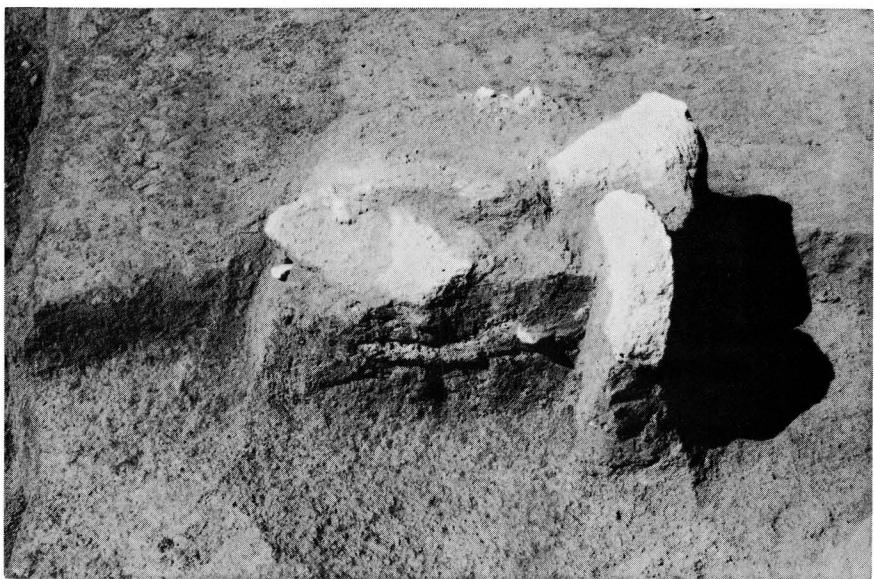


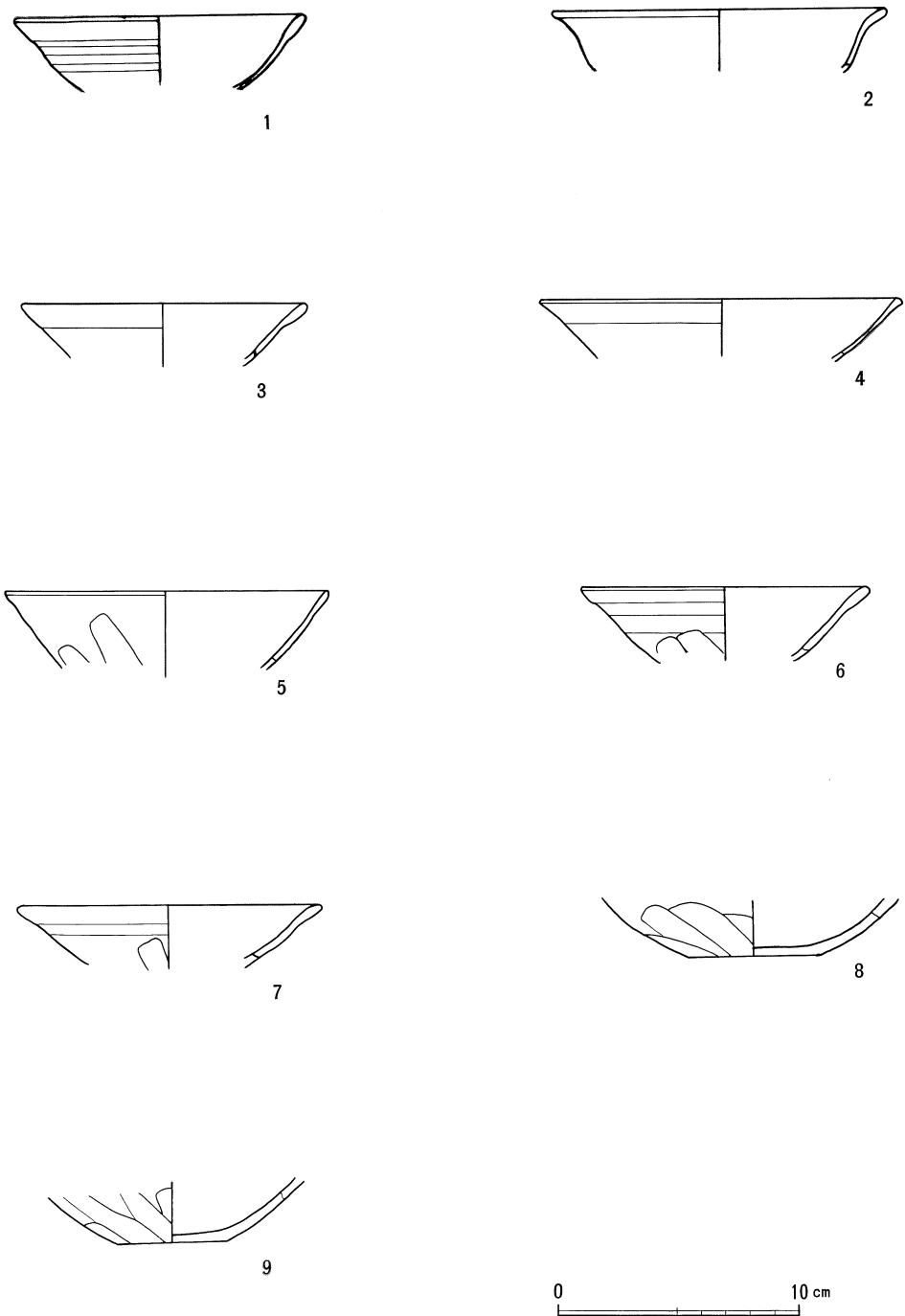


2号住居址全景

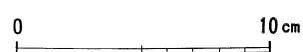
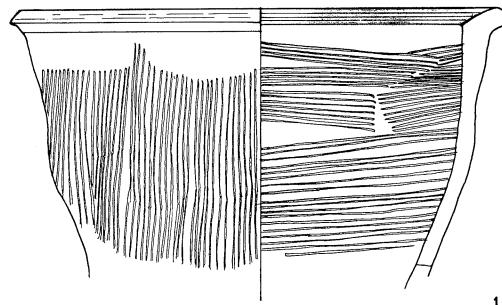
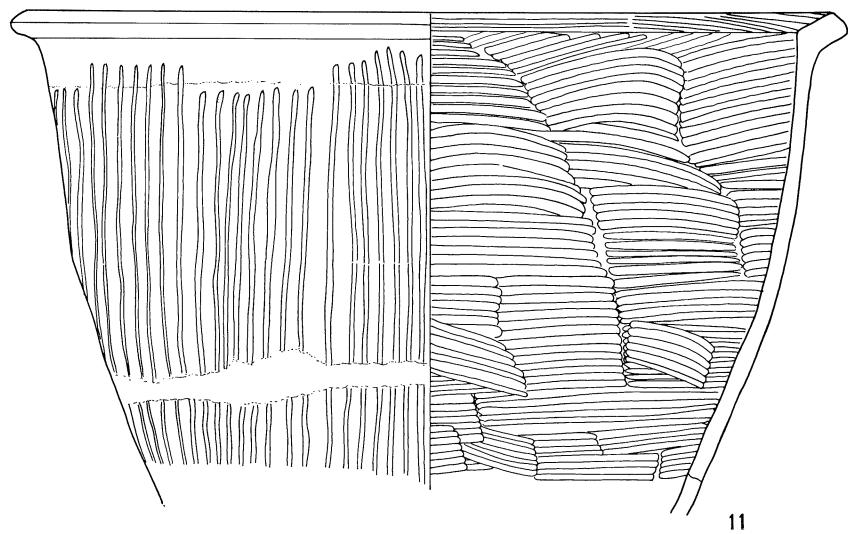
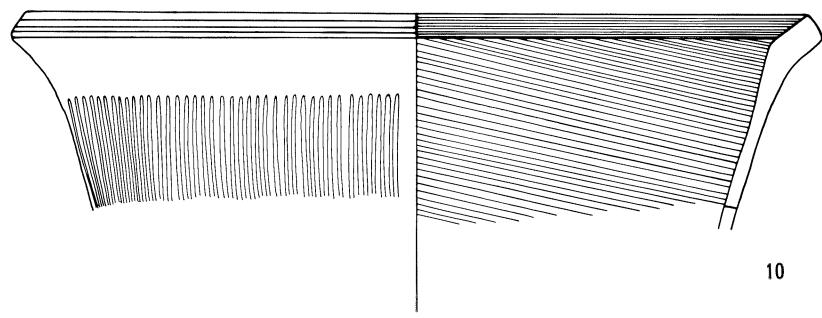
2号住居址カマド

右側にカマドの芯材となる補石が、中央には若干の焼土が認められる。





第40図 2号住居址出土遺物実測図 (1)

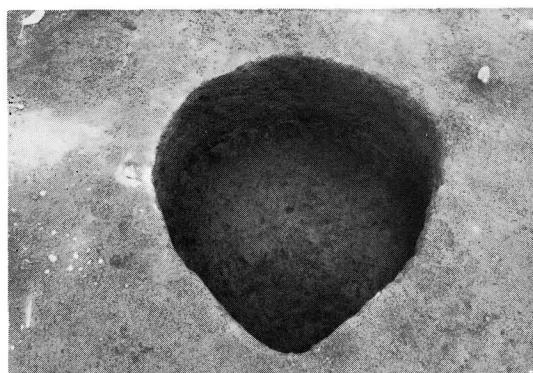


第41図 2号住居址出土遺物実測図 (2)

ピット

本地区では、39基のピットが検出されている。その大半は柱穴として機能していたものと想定されるが、限定された調査区域の中では、全体のピット間の関連性を明確に捉えることは困難であった。

E 地区 全 景



No.15ピット



No.16ピット

第12表 E地区ピット一覧表

(単位 cm)

No.	平 面 形	長 径	短 径	深 さ	備 考
1	楕 圓 形	65.0	60.0	22.5	
2	ほ ぼ 圓	135.0		22.3	調査対象は1/2、残りは調査区外
3	ほ ぼ 楕 圓	63.0	48.0	22.0	
4	〃	53.0	46.0	28.0	

No.	平面形	長径	短径	深さ	備考
5	ほぼ楕円	53.0	48.0	17.5	
6	"	66.0	54.0	26.5	
7	隅丸長方形	125.0	93.0	40.0	
8	ほぼ円	40.0			
9	不整台形	145.0	63.0	30.1	
10	ほぼ円	65.0		21.0	
11	"	132.0		不明	
12	不整長方形	58.0	53.0	20.0	
13	ほぼ円	38.0		30.0	
14	不整長方形	117.0	100.0	46.0	
15	"	110.0	37.0	46.5	
16	不整三角形	(底辺)115.0	(高さ)130.0	58.8	
17	ほぼ長方形	128.0	78.0	31.5	
18	不整長方形	127.0	66.0	28.5	
19	"	86.0	55.0	24.5	
20	"	113.0	62.0	40.8	
21	不整円形	97.0	85.0	39.0	
22	"	90.0	77.0	31.7	
23	不整卵形	90.0	83.0	41.5	ピット29と切合
24	不整台形	95.0	85.0	41.5	P—24とP—30の間でそれぞれ切合
25	不整卵形	135.0	125.0	43.0	6号溝と切合
26	推定円	90.0		40.0	ピット24、ピット27にはさまれ、それ切合
27	不整卵形	80.0	75.0	43.8	ピット26と切合
28	ほぼ円	67.0		35.0	
29	不整三角形	(底辺)155.0	(高さ)175.0	49.5	ピット23およびピット30と切合
30	推定長方形	85.0	77.0	43.8	ピット24とピット29にはさまれ切合
31	推定円	95.0		36.0	約1/2調査区外
32	推定不整方形	42.0	68.0	40.0	約1/3調査区外
33	ほぼ円	30.0		25.0	
34	"	33.0		26.0	
35	ほぼ台形	158.0	76.0	27.5	
36	ほぼ円	50.0		34.5	9号溝と切合
37	"	40.0		46.5	9号溝と切合
38					
39					

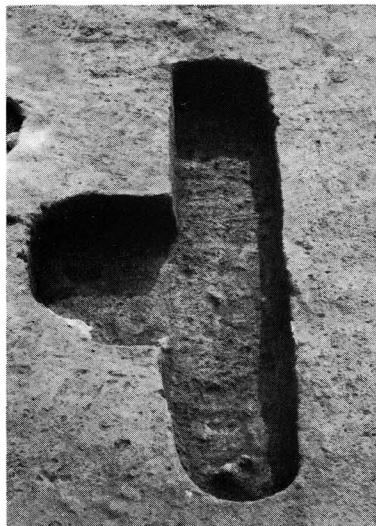
溝状遺構

本地区では、溝状遺構が11基検出された。これらは、およそ主軸を東西方向を持つものと、南北方向を持つものの二者に大別される。構築時期・機能など詳細については、不明である。

第13表 E地区溝状遺構一覧表

(単位 cm)

No.	最大幅	長さ	深さ	主軸	No.	最大幅	長さ	深さ	備考
1	66.0	407.0	45.5	南北方向	7	80.0	193.0	29.0	東西方向
2	58.0	545.0	19.0	"	8	50.0	165.0	30.8	"
3	65.0	307.0	33.6	東西方向	9	72.0	355.0	46.0	南北方向
4	60.0	316.0	28.5	"	10	67.0	290.0	19.5	東西方向
5	75.0	203.0	34.3	"	11	87.0	320.0	37.0	"
6	65.0	235.0	42.0	"					



No. 1 溝状遺構



No. 3 溝状遺構



溝状遺構調査風景

3 遺 物

本地区からは、歴史時代の土師器や須恵器が多数出土しているが、小破片ばかりで、器形を復元できるものは極くわずかである。土師器は坏が主体を占めており、玉縁状を呈する口縁や、範削り整形されている底部破片や糸切り痕を残すものも見られる。また、刷毛目整形された甕の胴部破片も数点認められた。須恵器は実測可能のものは皆無で、甕形を呈すると思われる破片が主体を占めている。いずれの破片も器面に叩き目が観察できる。

土 師 器 (第42図1~7)

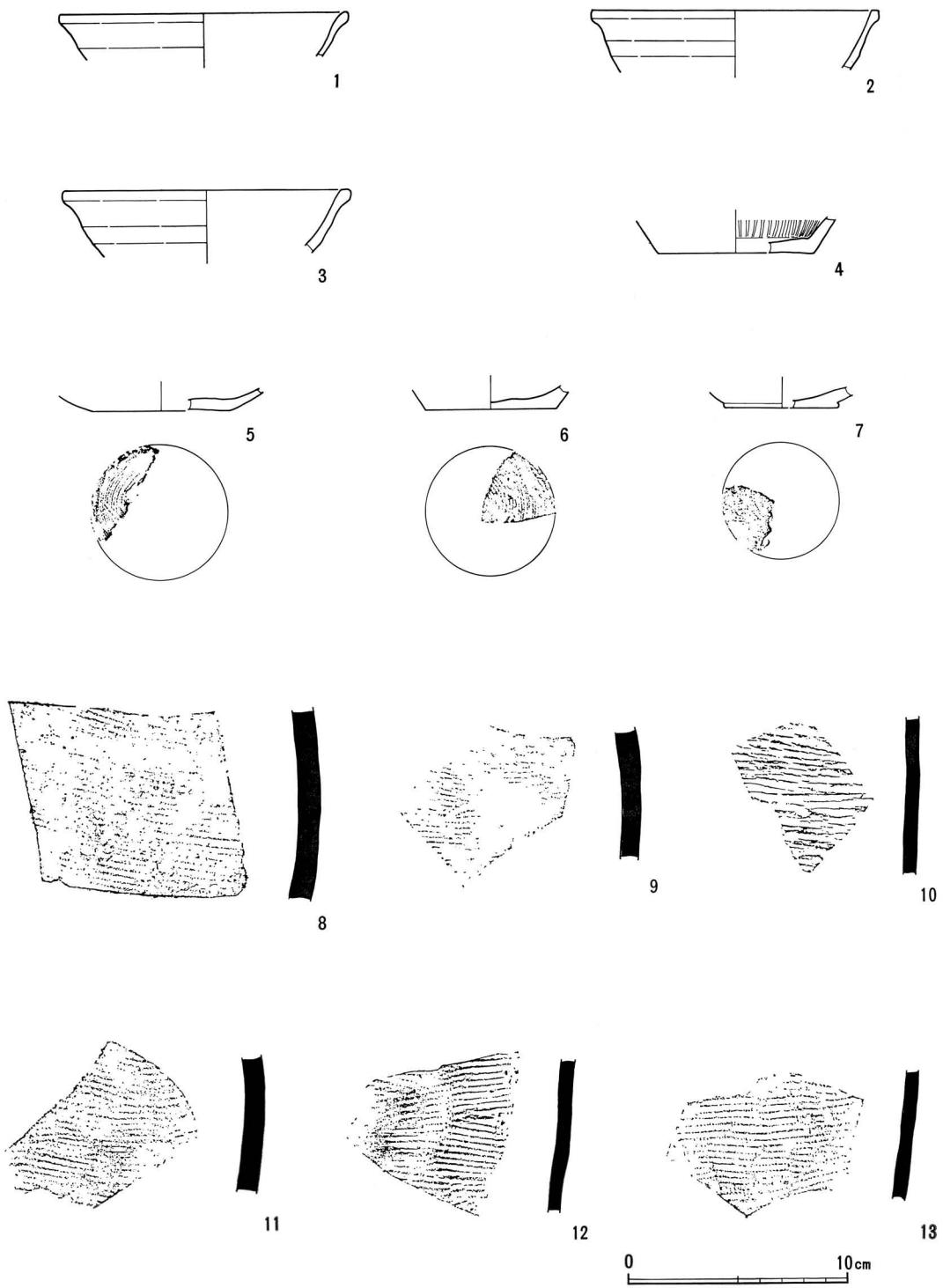
図示した1~7は坏形を呈するもので、1~3は口縁部、4~7は底部破片である。口縁部破片はいずれも玉縁状を呈しており、口径は1は、12.8cm、2は12.4cm、3は12.2cmを測る。器面には稜が認められる。5~7の底部外面には糸切り痕を観察することができ、4はナデ消している。また4の内面には暗文が認められる。それぞれの底部は、4は7.0cm、5は6.2cm、6は5.9cm、7は5.1cmを測る。

須 恵 器 (第42図8~13)

8~13とも甕の胴部破片である。いずれも外面に平行叩き目が観察され、布によって施されたものも見られる(13など)。内面の叩き目はナデ消されている。

第14表 E地区出土遺物観察一覧表

No.	種 別	整 形	胎 土	色 調	出 土 グリッド
1	土師器・坏	(内・外)ロクロ横ナデ	赤褐色粒・黒色粒	黄茶褐色	D-4
2	"	(内・外) "	赤褐色粒	赤褐色	E-2
3	"	(内・外) "	赤褐色粒	"	ピット内 (P-23)
4	"	(内・外) " (底外)糸切り→ナデ (底内)暗文	赤褐色粒	"	2溝
5	"	(内・外) " (底外)糸切り	赤褐色粒・黒色粒	"	D-4
6	"	(内・外) " (底外) "	赤褐色粒	黄茶褐色	ピット内 (P-16)
7	"	(内・外) " (底外) "	赤褐色粒	"	D-2
8	須恵器・甕	(外)平行叩き目 (円)ナデによるスリケシ	白色粒・黒色粒	灰色	D-1
9	"	(外) " (内) "	"	灰白色	D-4
10	"	(外) " (内) "	白色粒	暗紫色	
11	"	(外) " (内) "	白色粒・黒色粒	灰白色	B-4
12	"	(外) " (内) "	白色粒・黒色粒・長石	"	D-6
13	"	(外) " (内) "	"	"	



第42図 E地区出土遺物実測図

第V章 まとめ

第1節 概要

今回の鷹の巣遺跡の調査は、調査地点が離れていたり、また、調査対象範囲が限定されていたりで、遺跡の全貌を明らかにするには至らず、特に、B・C・D・E地区に拡がる掘立柱建物址については、限定された範囲では、その内容・性格とも明らかにすることは不可能であったとはいえ、今まで本格的な発掘調査が行われたことのない桂川右岸の猿橋溶岩流上において、9世紀以降、10世紀から11世紀初頭にかけての集落址の存在が確認され、その一断片をかいしま見ることができたのは、今後の当地域における歴史時代研究の上で前進となった。

古代律令体制下において、山梨県東部は都留郡に包括され、都留市域は多良郷に比定されている。この多良郷の範囲がどの程度に拡がっていたかは、まだまだ今後の研究を待たねばならないが、概略、現在の禾生から十日市場にかけての桂川流域、大幡川・管野川・朝日川・戸沢川・朽柄流川・鹿留川などの桂川支流域などに、その拡がりを有するものと思われる。同地域には河岸段丘が形成され、段丘上におもに遺跡の占地が認められるが、鷹の巣遺跡周辺はこの中でも最も広い平坦地を有し、また、交通の要所もある。鷹の巣遺跡の桂川をはさんだ対岸の牛石遺跡では、奈良・平安時代の住居址・掘立柱建物址などが20数軒検出され、同地域が多良郷の中でも中心的役割を果していたことが窺われる。今回の鷹の巣遺跡発掘調査では、住居址4軒、掘立柱建物址、溝状遺構などが検出された。この成果だけでは、同遺跡が多良郷の中心地であったとは言いがたい内容であるが、今回の調査対象地区の周辺には、数多く検出されたピット群（掘立柱建物址の柱穴址）を用いた人々の居住域（住居址群）の存在が当然予想され、合わせて、大きな集落を営んでいたことが想像される。

第2節 住居址について

今回の調査によって検出された4軒の住居址は、いずれも一辺2m～4mの小規模なものであった。4軒の住居址は、出土した土師器より3期に区分される。

第I期はA地区第2号住居址で、8世紀末に、第II期はA地区第1号住居址で、9世紀末に、第III期は、E地区第1・2号住居址で、10世紀後半に、それぞれ比定されるものと思われる。

第15表 鷹の巣遺跡住居址一覧表

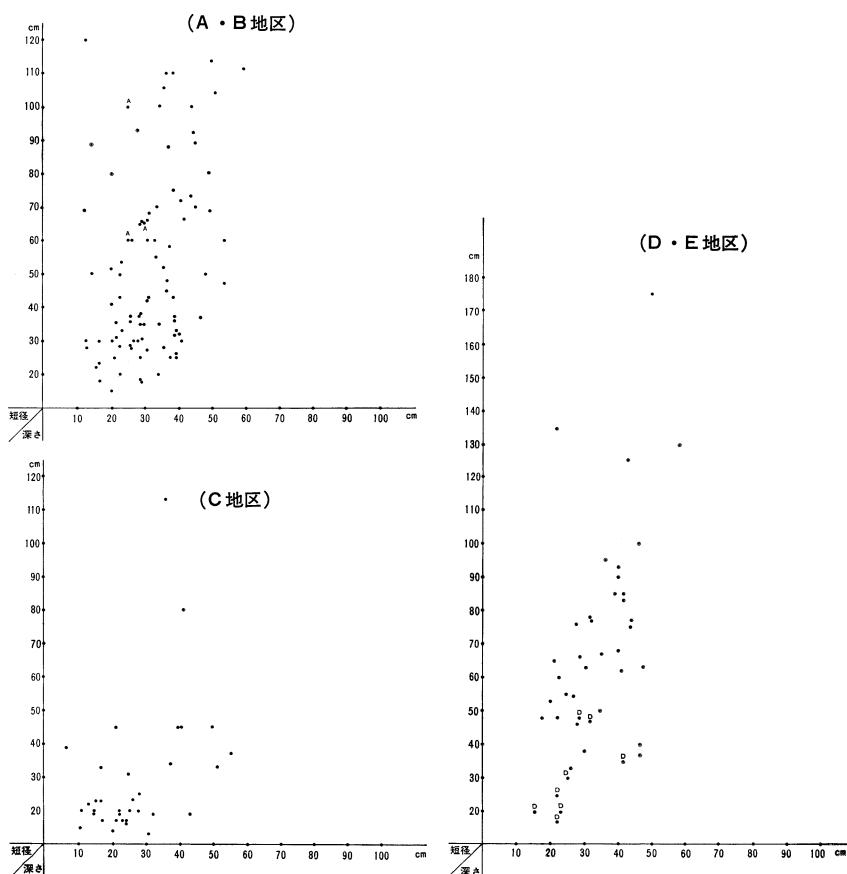
住居址番号	規 模	プラン	主軸方向	時 期	備 考
A区 1号住	(東西) 2.6m (南北) 3.0m	不整方形	N-3°-E	9世紀末	
〃 2号住	(東西) 2.55m (南北) 3.3m	"		8世紀末	
E区 1号住	(東西) 2.65m (南北) 2.1m	方 形	N-1°-E	10世紀後半	
〃 2号住	(東西) 4.45m (南北) 3.06m	長 方 形	N-3°-E	"	

第3節 ピットについて

A地区で3基、B地区で94基、C地区で54基、D地区で9基、E地区で39基の計119基のピットが検出された。これらは掘立柱建物址の柱穴址と思われるが、B地区で5棟、C地区で2棟が推定されたのみで、大半は建物址の復元は不可能であった。これは複雑にピットが重複し合っていることと共に調査対象地区が限定されていたために、各建物址の全貌を捉えるに至っていないことに起因するものと思われる。

各調査区の内、特にB地区では全体のほぼ半数にあたる94基のピットが検出され、このピットの周辺からは、9世紀中葉以降、11世紀初頭に亘る土師器壺・須恵器甕の破片が出土している。これらは、同地区における掘立柱建物址の長期的な営み（建て替えを含む）を示唆しているものと思われる。

第43図は、各地区のピットの規模（短径×深さ）の分布である。各地区ともかなりのばらつきが認められるが、B地区では短径20cm～40cm程のものが、C地区では短径20cm前後のものが、E地区では短径45cm～70cmのものが、それぞれまとまりを見せていている。



第43図 鷹の巣遺跡ピット規模分布図

第4節 溝状遺構について

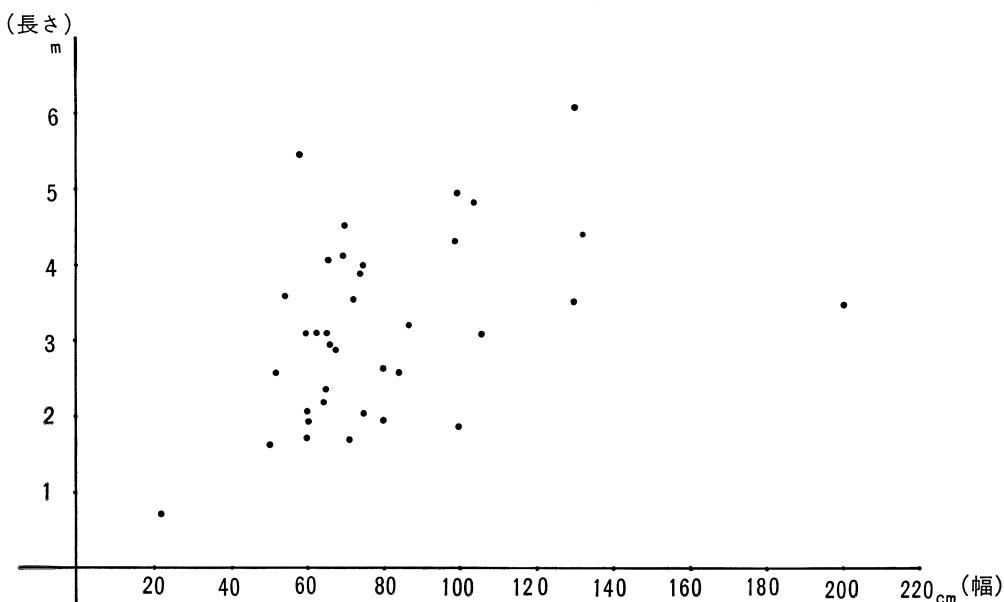
A地区で1基、C地区で24基、D地区で1基、E地区で11基の計37基の溝状遺構が検出されている。これらは、第44図のように幅20cm～200cm、長さ70cm～610cmに亘り、かなりばらつきが認められる。しかし、各溝はその主軸方向に一定の規則性が認められ、大きく南北方向に主軸を有するものと、東西方向に主軸を有するものとに二分される。

A地区で検出された第1号溝状遺構の主軸は東西方向であり、C地区で検出された24基の溝状遺構は東西方向が10基、南北方向が14基、D地区では南北方向のもの1基、E地区では東西方向7基、南北方向4基である。これらの溝状遺構の主軸方向の規則性は、同遺跡全体に及ぶものであり、溝状遺構の性格の一端をなしている。

溝状遺構の構築時期は、出土遺物も少なく積極的に決定付けるに至っていない。ただ、覆土観察からすると、ピット群より新しい時期の所産と考えられる。

このような溝状遺構は、市内では山梨原遺跡において、検出されている。この山梨原遺跡では、45基の溝状遺構が検出され、これは幅40～90cm程、長さ2～4m程のもので、鷹の巣遺跡と同様に主軸方向が南北方向、東西方向の直交する両者が認められている。また、山梨原遺跡では、溝状遺構内よりカワラケの底部破片が出土し、溝状遺構構築時期を考える手掛りとなった。しかしながら、同遺構の性格を究明するには至っていない。

いずれにしても、今後の類例を待ちたい。



第44図 鷹の巣遺跡溝状遺構規模分布図

お わ り に

中央自動車道富士吉田線四車線化に伴う埋蔵文化財発掘調査事業は、昭和53年10月から着手した堀之内原遺跡の発掘調査を出発として、7年間の歳月を要して、本事業最後の鷹の巣遺跡発掘調査報告書刊行に至った。

この間、堀之内原遺跡・中谷遺跡・宮脇遺跡・山梨原遺跡・鷹の巣遺跡の5遺跡の発掘調査を実施し、本調査報告書を含めて、4冊の報告書を刊行した。

本事業を進めるに当っては、県文化課の波木井市郎氏(現在、県立考古館副館長)・末木健氏の御指導・御教授と、日本道路公団富士吉田工事事務所の関係者の御協力を賜わった。また、調査・本報告書の作成に当り、日本大学考古学研究会・都留文科大学考古学研究会会員の献身的な御協力を賜わった。最後に、忘れてならないのが、堀之内原遺跡・中谷遺跡・宮脇遺跡では、小形山地区、山梨原遺跡では、上・下夏狩地区、鷹の巣遺跡では、鷹の巣地区の、それぞれの地区婦人会や老人クラブの会員諸氏の御協力である。おわりに当り、これら多くの関係者に厚く感謝申し上げます。

鷹の巣遺跡
中央自動車道富士吉田線四車線化
工事に伴う発掘調査報告書

発行日 昭和 60 年 3 月 31 日

編集 都留市教育委員会

発行 都留市教育委員会
日本道路公団東京第二建設局

印刷 第一法規出版株式会社
東京都港区南青山 2-11-17
TEL 03-404-2251 (大代表)

